アンナ・フロイド原著

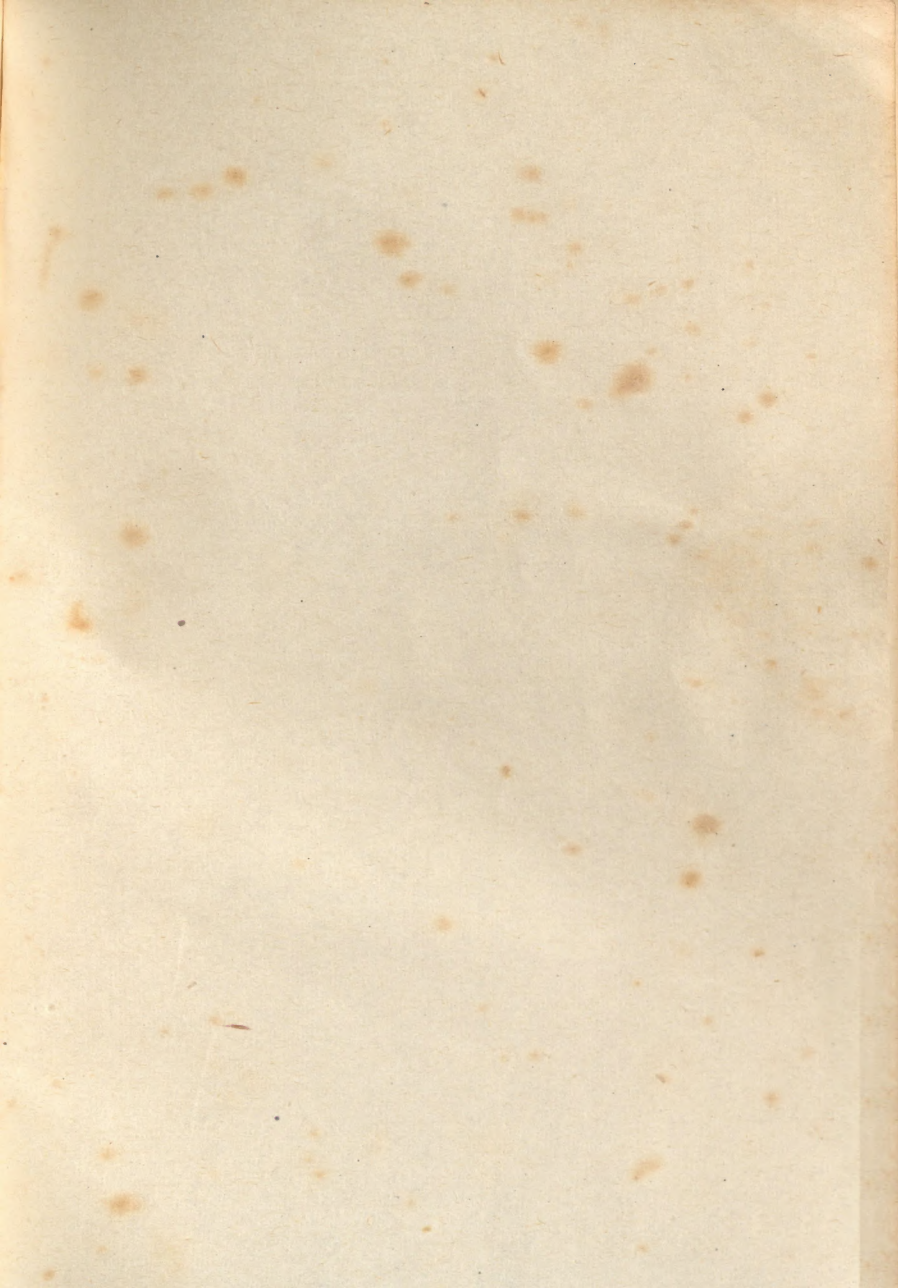
教育者の爲の
精神分析講話

大槻憲二註解

宮田齊譯

ANNA FREUD
EINFÜHRUNG IN DIE PSYCHO-
ANALYSE FÜR PÄDAGOGEN

Übersetzt von Hitosi Miyata
Anmerkungen von Kenji Ohtzki

(TOKIO, 1941)

東京精神分析學研究所刊行

アンナ・フロイド原著
宮田齊譯

教育者の爲の精神分析講話

――『精神分析叢書』第三冊――

東京精神分析學研究所刊行

序　文

さきに『精神分析叢書』第一册として我等の刊行したる『兒童心理分析法講話』（馬場由子譯）の原著者として、アンナ・フロイド女史の名は、既にわが讀者諸君にまで親しみのあるものとなつてゐると信ずるが、念のために更めて紹介するならば、女史は精神分析學の父祖ジグムント・フロイド敎授の令嬢であり、祕書であり、女流分析者として兒童分析の新分野を開拓した人である。女史は現に英國ロンドンにあつて、空襲の脅威のために神經症化する兒童保護局の治療主任の位置にあつて、精神分析學の應用を以つて活躍しつゝある。

譯者宮田齊氏は女子敎育界に幾多の功績を遺して行かれた故宮田修氏の嗣子にして、また先考の跡を襲うて現に成女高等女學校長の重職に在る人。氏は單によき敎育家であるばかりでなく、秀拔なる語學者であつて、英、獨、佛の各國語に通曉せられ、譯文亦御覽の

通り極めて流暢正確である。さきにパーマー氏原著『國語羅馬字化の原理』(岩波書店)を公刊せられたことがある。

本書の內容及び成立の過程に就いては、譯者自身の紹介が次に掲げてあるから、私の序文はたゞ原著者と譯者との紹介にとゞめておく。

昭和十六年十二月

大槻憲二識

譯者自序

以下譯出する『教育者の爲の精神分析講話』はアンナ・フロイド女史がウィーン市の兒童ホルト（Kinderhort）に働く教育者達の爲に行つた連續講演の筆記である。譯文によつて要領も明らかなる如く女史は四回の連講に於て分析的觀點よりする兒童の reaction に就て要領よく且つ豐富に物語つてゐる。固より國情の異るオーストリーの、然も日本に無い特殊な教育施設に働く人々の爲になされた講演であるが、此の著作から與へられる示唆は決して尠くないと信ずる。なほホルトは一種の託兒所で、六歲から十四歲迄の兒童を收容する。彼等の多くは晝間は勞働に從事する親の子供達であつて、ホルトに集つて勉強したり、簡單な勞働に携はつたり、遊戲戶外運動等をやるわけである。

因に、本譯文の底本は瑞西ベルン市 Hans Huber 書店刊行の、"Einfuehrung in die Psychoanalyse fuer Paedagogen" の第二版であるが、外にロウ女史（Barbara Low）の英譯

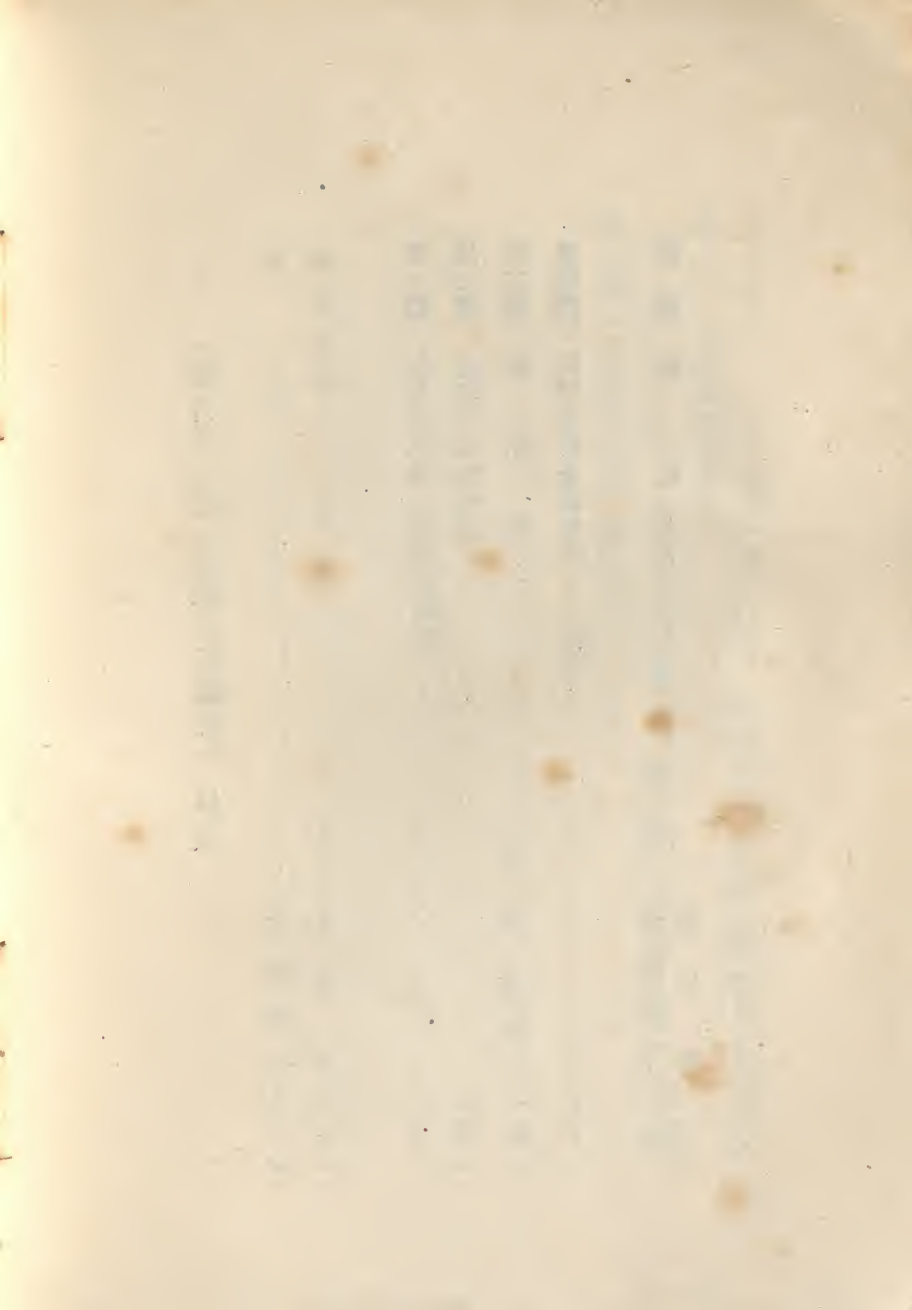
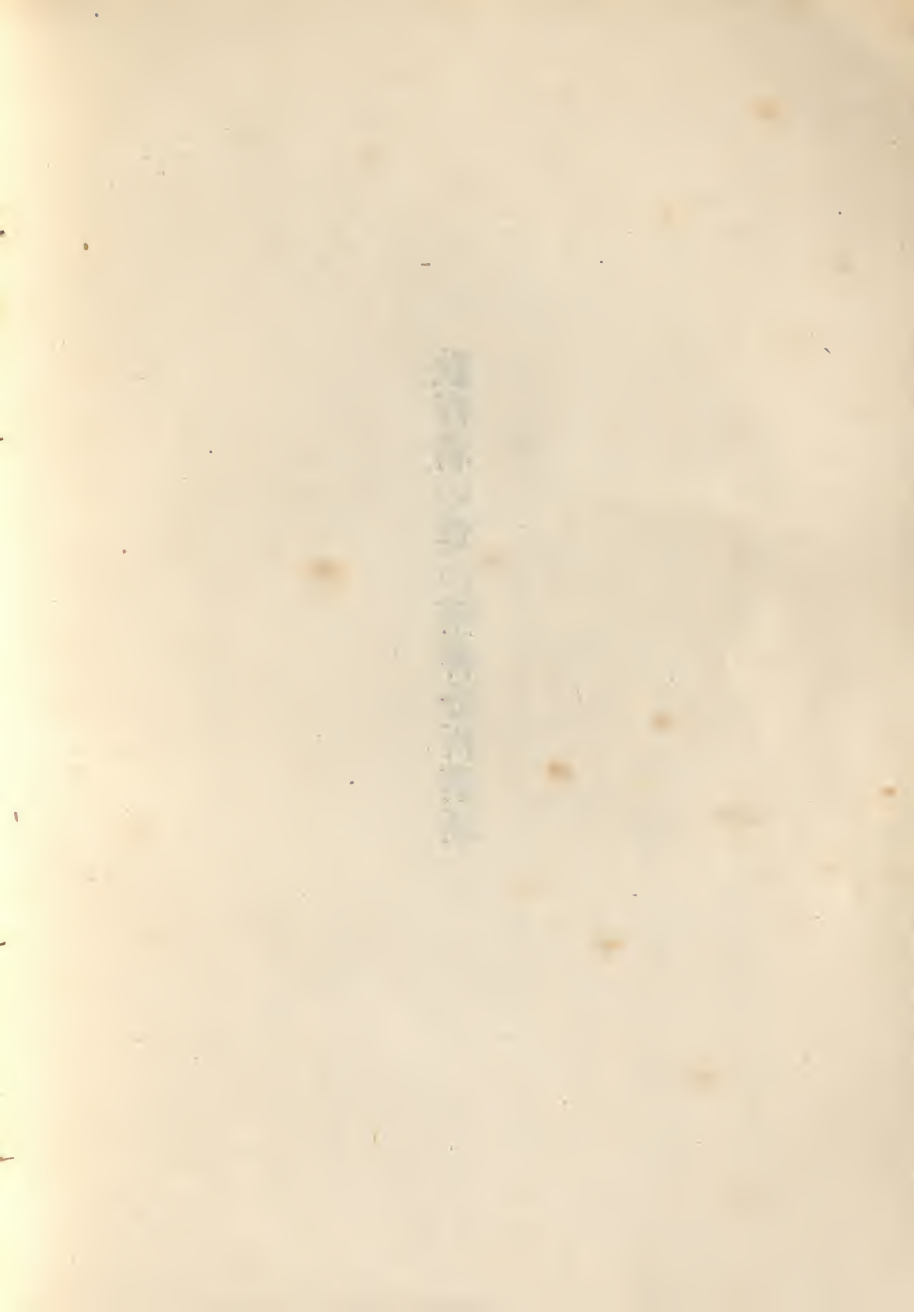
("Introduct on to Psychoanalysis for Teachers, London, Allen & Unwin")に據つて誤なきを期したことを御承知頂きたい。

尙、譯稿の校合に當つては山浦淑子孃の協力を、校正に際しては同僚數氏の助力を得た。附記して玆に厚く感謝の意を表する。

昭和十六年十二月

宮田齊識

『教育者の爲の精神分析講話』目次

――『目次』終――

教育者の爲の精神分析講話

第一講　幼兒性忘却と對兩親關係

—Die infantile Amnesie und der Oedipuskomplex—

（1）　私共は實際敎育に携はつて居られる方々が今日もなほ精神分析とは寔に緣遠く、且つ尠からぬ疑惑を懷いて居られる事を承知してゐるので、今度ウィーン市のホルト敎育者の皆樣が、斯樣な實狀にも拘はらず私を招いて短期の講演を依賴されたことは、恐らく皆樣方が此の精神分析と云ふ新しい科學に就て一層精確な知識を得て、皆樣の携はつて居られる困難な仕事の上に何等かの意味で役立たうと御感じになつた結果であらうと存じます。處で、さういふ御期待が見事に裏切られて了ふか、或はまた少くともそのうちの幾分かゞ私の力で充たされ得るかどうかは、今後四回に亘る講演をお聽取りになつた上で皆樣御自身に御決定を願ふべき事柄でございませう。

扨て私は玆で、皆樣に向つて學校とか或はまた此のホルトのやうな敎育施設に於ける兒

童の行動に就て何か耳新しいことを申上げようとは考へて居りません。何故ならば皆様方は此の點にかけては非常に都合の好い立場に立つて居られるために、毎日の御仕事の間に澤山の材料を用ひて、身體的に或は精神的に教育の後れた子供やら、不從順な臆病な、嘘吐きで僻んだ者から、兇暴で反抗的な犯罪少年に至る迄の多種多樣な現象を明確に認識なさることが御出來になるからであります。從つて、此の方面に就ては特に新しいことを申し上げるわけにも行きませんし、よしんばさうした子供達の種類別を一々表にして擧げて見たところで結局却つて皆樣方の方から澤山の脫落を指摘して頂くやうな結果になつて了ふと思はれます。

（2）

併し乍ら、また一面から考へれば、皆樣がこのやうにあらゆる現象を充分知り盡すことが御出來になるといふその情勢そのものに自から缺陷があるのであります。皆樣はホルトの兒童教育者として、學校や幼稚園の先生方と全く同じやうに絕間なく活動しいいいしなければならぬ立場に立つて居られます。皆樣が擔當なさつて居るクラスやグループの生活・活動は始終皆樣の干涉を必要として居り、皆樣方は子供達をば意見し、保護し、秩序づけ、働か

せ、訓誨なさり、敎授なさらなければなりませぬ。若しも皆様方が急に思ひ立つて突然受身的な觀察者の立場に引籠つて了はうとでもされゝば皆様方の上に立つ當局の人々は大に不滿に思ふ事でせう。斯様な次第で、皆様は御職掌柄兒童の本性の數限りない顯はな表現を見ておいでにはなるが、眼の當り見るさうした現象を秩序立てて整理する事も御出來にならず、また敎育を加へて行かなければならぬ肝腎の兒童の本性表現の源を極めて行く事も御出來にならないやうな狀態であります。

　また、さうした何等の制約を受けない觀察を行ふ機會に乏しいこと以上に恐らく皆様方に缺けてゐるものは、與へられた素材の正當な分類・說明を行ふ能力でありませう。何となれば、そのやうな分類は非常に特殊な知識を必要とするからであります。一例として、御列席のうちのどなたかゞ、受持の何某といふ兒童が例へば眼を爛らしてゐるとか、或は佝僂病をわづらつてゐるとか言つてその原因を突きとめようとして居られるものと假定して見ませう。先づ、此の子が貧乏な、ジメジメした家から通學してゐるといふことは分りますが、さてその家の部屋の壁から發散する濕氣がどんな特殊の過程を經て子供の病氣の

原因となるかといふことになると、これは專門の醫學的知識を持たない限り明瞭な說明を下すわけにはまいりません。また中には、飲酒家の子女が遺傳のためにいろいろな危險に曝されるといふ現象の眞相を識りたいと思ふ方もありませうが、これには遺傳學の硏究が必要であり、失業問題と住居の拂底、兒童不良化の問題、等の關係を見出すためには社會學に就て知つてゐなければならないわけであります。それと同樣に、さきに申上げたいろ〳〵の現象の心理的背景を硏究し、その相異してゐる點を理解し、其等の現象が個々の兒童に於て徐々に發展して行く過程を辿つてゆかうとする敎育者は精神分析といふ新しい學問からいろ〳〵學ぶ所があると信じます。

進步した知識が實際の仕事に與へる斯樣な援助は、皆樣方ホルトの敎育家にとつては二つの理由から重要な意義をもつてゐると私は考へます。第一にホルトといふ施設は、家庭の內外にあつてあらゆる危險に曝されてゐる子供達を通學時間以外の時に預かる、ウィーン市では最も新しい敎育機關であつて時と共にその數を增してゆく不良化兒童の言はゞ救濟所の如く見られてゐるのであります。ホルトの存在は放任と非社會性との最初の段階に

(3)

ある兒童が、斯様に學校或は家庭と密接な關聯をもつ環境（Milieu）に於て感化される方が、後になつて、長い間放任されてゐた爲に教育的働きかけでは最早手のつけられないやうになつてしまつた思春期の不良兒や犯罪少年を感化院に隔離して見るよりも、一層効果的であるとの信念によつて基礎づけられて居ります。

併し、現在のところではホルトへの義務通學といふやうな制度がありません。當局は親に對して、その子女を學校に入れる義務を課することは出來ますが、たとひ家庭に於ける子供の狀態が悲慘きはまるものであつても、その子をホルトに委託するかどうかは全然親の判斷に任せることになつて居ります。そこで、兒童ホルトは特に良好な成績を擧げることによつて各の兒童に向つて、またその兩親に對して、自己の存在を不斷に裏書きして行かなければならない立場にあるのであります。それは宛も、初めて種痘が勵行された當時、その必要が如何に大きいかといふことに就て再三世間の親達に説明してやらなければならなかつたやうなものです。

（4）　兒童ホルトで働く教育者はなほこれ以外の方面でも、また特別困難な立場に立つて居り

ます。それはホルトに預けられる子供達の殆んど全部が既にいろいろの、おのづから程度の差はあれ何れも相應に深酷な、體驗をして來て居り、その上多勢の教育者の手を經て來てゐるといふ事實であります。斯樣な子供達は――少くとも最初のうちは――教師の眞の人格と彼等に對する教師の實際の行動に對して少しの反應をも示さないものだといふ事にホルトの教育者は注意しなければなりません。彼等は既にある先入的な心的態度を備へて居つて、惡くすると先生に對しても他の成人達に接して得た彼等の個人的體驗によつてつくりあげた疑惑的な、挑戰的な、或は警戒的な態度をもつて臨むことがあります。それに、兒童ホルトでの兒童の生活はその學校生活の補足に過ぎず、其處で應用されるいろいろの教育方法も一般の學校で用ひる方法に比べて一層自由な、一層人間的・近代的なものであるために、學校が子供に要求しまた子供に奬める行爲の標準なるものが、ホルトの目的達成の上には却つて障害となるやうな場合も起つて來るのであります。

斯樣なわけで、兒童ホルトの仕事に携はる者の立場は決して羨むべきものではありません。殆んど總ての場合に、自己獨特の理解と活動とを要する困難な問題に直面しながら

も、ホルトの教育者は、後ればせに登場する協力的教育家としての役割をしか振られてゐないのであります。

と申しても、學校の教師の立場がホルトの仕事に携はる人々の立場よりも惠まれてゐると考へるのは正しくありません。學校の教員にしたところで、全然手つかずの子供を取扱ふことは殆んどないといふ不平を常に懷いて居ります。例へば、小學校初年級の兒童はすでにして幼稚園の遊戲的雰圍氣のなかに生活して來た經驗をもつてゐるので、之に向つて教師に對し或は定められた訓育の仕方に對して望ましいやうな、眞劍な態度を敎へこむことは非常に困難であります。彼等は幼稚園で習得した擧措態度を學校迄持ち越して來るわけですが、これは最早（學校では）面白くないことなのであります。

（5）

併し乍ら、飜つて、只今迄の論法でゆくと未耕の地に最初の鋤を入れることが出來るといふ羨むべき立場にある筈の幼稚園の教育者を考へて見ると、此等の人々が、其の實、幼稚園の世話になる三歲から六歲位迄の幼兒ですらすでに「仕上つた人間（フェアティーゲ）」になつてゐるとの嘆聲を擧げるのを聞いて、私共は呆れないわけには行かないのであります。どの子もど

の子も皆いろいろな特性をもつてゐて、各自が自己獨特の仕方で教師に反應して參ります。どの子供にもそれ相應の希望やら、不安やら、好き嫌ひ、特有の嫉妬心や愛情、愛の（6）要求または拒否、等の明瞭な系列があるのであつて、教師は未完成の人間に向つて自分の個性を植えつけるどころの話ではなくて、感化を與へることが非常に困難な、複雜極りない多數の小人格の間を游ぎまはるに過ぎない實狀であります。

斯樣なわけで、教育者といふものはホルトにしろ、學校にしろ、或は幼稚園にしろ、何れを見ても皆同じやうな困難な立場に置かれて居るのであります。人間は慥かに、一般に想像されて居るよりも早く成熟するものでありまして、教育者達にいろ〳〵世話を燒かせる幼兒期の特性をその根源に溯つて探究する爲めには、兒童が公共の教育機關に入つて來る以前の時代を究め、彼等の生涯に於て實際上最初の教育者となつた人々に迄立戻つて考へて見なければなりません。詰り、生後五ケ年間の時代とその子供の家庭とを研究しなければならないのであります。

斯う申すと皆樣は、私共の課題がずつと簡單になつて來たかのやうに御感じになるかも

知れません。學校又はホルトに通つて來る大きくなつた兒童の日々の態度行動を觀察する(7)代りに、極く幼い頃の彼等の印象やら追憶やらに就ての資料を聞き出せばよいことになつたのですから。

これは一寸考へると何の苦もなく出來さうに思へます。皆樣方は悉く、皆樣に托された生徒との交渉に於て彼等と皆樣方御自身との間に眞摯な、信頼に滿ちた關係をつくり上げやうと努力なさつて來たわけでありますが、これが差當り洵に都合のよい準備工作でありまして、皆樣方が理解を以て質問なさりさへすれば子供達は何時でも喜んで凡ての事をお話しする氣になつてゐるわけです。

處が、そのやうな試みをして御覽になるのも結構なのですが、實は其の結果が不成功に終るであらうといふことを私は前以て豫言致すことが出來ます。と申すのは子供達は過去の事に就て何の報告も與へて吳れないものなのであります。彼等は最近二三日或は二三週間の間に起つた事柄や、異つた環境で過ごした休暇中の出來事や、今迄に逢つた誕生日や聖日の事や、時には去年のクリスマスのお祭の話等迄喜んで話して吳れるでせうが、それ

以前の事になるとパツタリ記憶が停止して了ひます。――と云ふより寧ろ自分の記憶して

ゐる事を他人に話す能力が缺けて了ふのであります。

皆樣方は「いやそれは過去の出來事に就ての子供の記憶能力を過信するといふものだ。子供と云ふものは、今迄の生涯のうちに起つた事柄の中何れが重要で何れが重要でないかといふやうな區別をつけないものだから子供に向つて幼兒時代の追憶を尋ねるよりも、斯ういふ研究に興味をもつてゐる成人を相手にした方がずつと效果もあがり、理窟にも合つてゐるわけだ。」と云はれるでありませう。これも實地に就て試みて御覽になるがよからうと思ひますが、皆樣方は、如何に好意を寄せて吳れる友人であつても殆んど報告すべき何物をも持つて居ないといふ事を發見して吃驚りなさつて了ふでせう。

先づ五六歲頃から後の話は或は比較的辻褄のあつた筋の通つたものかも知れません。いろ〱の物事を習はせられた事だの、三、四歲から五歲の頃住んで居た家の有樣だの、兄弟姉妹の頭數や名前だの、時には轉宅或は不幸と云つたやうな事件位は話して貰へるかも知れません。が其處迄行くと彼の報告はハタと行詰つて了つて、皆樣が折角見付け出さう

として居られる事、詰り、彼の個性及び特質となるべきものがその幼い頃にどんな風に發展して來たかを見出し得ない中に事は終つて了ふのであります。

併し、この失敗には一つの原因があることを知つて置いて頂かなければなりません。私達が探求しようとする事柄、即ち、各個人の性格發展に於て極めて重要な役割を演ずべき事といふものは、疑もなく其の個人の生活にとつて最も秘密な事件、彼が自分の極々内密な體驗として、たゞ自分だけに告白し、一番近しい友人にさへも恥しくて隱さなければならないやうな事柄に相違ありません。

そこで私達は、豫め此の事情を考慮して、問題の全貌を報告し得る立場にある唯一の人、詰り自分自身、に就て材料を求める他はないのであります。正常の成人がもつ記憶の能力、即ち自己啓示を阻止してゐる羞恥感の障壁を進んで打破り、探求に對する關心を興し得る能力、と云ふやうなものは之を私達自身から求めなければならないのであります。

とは申せ、縱令私共が凡ゆる興味をもち、細密な注意を拂ひ、能ふ限り正直にならうと力めて見たところで、矢張りその結果はきまつて大いに貧弱ならざるを得ないのでありま

す。私共の生涯の最初の一二年間を殘りなく白日の下に曝し、當時の追憶の連鎖を一ヶ所も缺けた所なく辿つて行くことは出來ないのであります。私共は色々の出來事を列べて行つて或る年齢迄は溯る事が出來るかも知れません。此の年齢は各個人に依つて異つてゐて、多くは五歳乃至は四歳、時には三歳位に及ぶことがあります。が扨て、それから先は大きな缺隙、一つの暗黑地帶になつて居て、纔に前後の繋がりもない斷片的な追憶があるばかり、然も是すら注意して觀察すれば、殆んど意義のない重要性に乏しいもののやうに見へるのであります。

例へば、或る青年は四歳以前の追憶としてたゞ、何處かの汽船の上で、奇麗な制服を著けた船長が腕を延ばして自分を小さな手摺の上迄抱き上げて吳れたと云ふやうな簡單な場面を想ひ起す丈けに過ぎないかも知れません。然も――當時を知る人々の話を綜合して見ると――此の時彼は非常に激しい內的葛藤と傷ましい運命の打擊を蒙つてゐた筈なのであります。或はまた、有爲轉變の幼年時代を送つた少女が、當時の追憶としては、自分が乳母車に乘つてゐて、後から車を押して來る乳母の顏を振り仰いで見た事丈けをはつきり記

（8）

憶してゐるに過ぎない場合もあるのであります。

茲に私共は世にも不思議な、矛盾した事實に直面する事をお認め頂ける事と思ひます。親しく幼兒を研究して見、また身寄の人々から聞かされる私達自身の幼少の頃の話を想ひ合せて見ますと、此の年頃の子供は物解りもよく、振舞も活潑であり、好き嫌ひの區別もはつきりして居たりして、いろいろな點で全く理性的な人間のやうに行動するのでありますが、一方に於て、此の時代の記憶といふものは全然拭ひ去られて了ふか、さもなければ、殘つたところで極く僅かの不完全な痕跡程度のものに止ると云ふ有樣であります。前にも申上げた通り、社會教育家、學校教員、幼稚園の先生等の經驗が示すところに依れば、人間は此の幼年時代を經過した後にすつかり仕上つた小さな個性（Individualitäten）として世の中に出て行くのですが、それでゐて、記憶力の方はといふと、誰もがいろいろの印象を受けてそれを銳敏に體得することが出來た時代、此の複雜な發展が個性を形成して行つたあの時代、の痕跡を止めて置くことがまるで何の意味もない事でゞもあるかのやうに作用するものなのであります。

（9）在來の正統派心理學は此の外見的な事實に惑はされて居りました。此の一派では、人間の精神生活のうち自己自身に解つてゐる部分のみを研究の對象として極端に重く見る餘りに、幼兒期のもつ意義といふものを、本人にも解つて居ないところから、自然輕視するやうになつたのであります。處で、この矛盾に始めて眼を著けたのは實に精神分析でありました。精神分析は、人間が日々繰り返してゐる些細なやり損ひ――例へば、物忘れ、見失ひ、置き忘れ、讀み違ひと云つたやうな現象の裏に其等のやり損ひを演ずる人の或る意圖が潜んで居ることを發見したのであります。此の種の現象は從來、放心とか疲勞とか或は其他のいろ〳〵の偶然の結果であると云ふ風に至極簡單に說明されて居りましたが、精神分析的にやり損ひを研究した結果、人は原則として、當人自身には大抵の場合意識されてゐないまでも、何かそれ相應な忘れ度いと云ふ願望を持たない限りは決して物忘れをしないと云ふ事實が明かになつたのであります。

（10）また精神分析は、幼兒期に於ける記憶の缺除と云ふことに就ても在來の說明の仕方では滿足する事が出來ず、記憶の喪失と云ふやうな顯著な現象は何かの根強い動機なしに起り得るものではないと考へました。幼兒期を覆ふ

てゐる闇黑、之を明らかにしようとする凡ての試みが乘り上げる暗礁そのものが「此處にこそ何か重大なものが潜んでゐるのだ」と考へさせたわけなのであります。

例へば強盜が特別に精巧な鍵のついた破り難い金庫を見て、其の中に澤山の財寶が入つてゐると判斷するやうなもので、人間は全く價値のないものを藏つて置くためにこれ程の精力を費す筈はないのであります。

併し、私は、此の席上で皆樣方に、精神分析がどんな道筋を辿つてこの幼兒期の記憶の再生といふ目的に到達する事が出來たかと云ふことをお話しようとは思つて居りません。精神分析の方法そのものゝ說明を申上げるには到底今晩の時間だけでは間に合ひませんから、この方面の詳しい研究と檢討とはまた別の講座を待つて頂くことにして、只今の處は

(11) 精神分析の力で再生することが出來た幼兒期の(經驗)內容を第一の問題としてお話を進めて參らうと思ひます。要するに精神分析は、前に申上げた日常生活に見るやり損ひや健康人の夢の分析、そしてまた精神上の不健康者の症候の分析と解釋とによつて玆に申す再生を行ふことが出來たのであります。

幼兒期の精神分析的再生は、乳兒が生れ出る當時から備へてゐる遺傳素質丈けを持つてゐる時期迄遡ります。詰り、私共が誤つて、いろ〳〵の教育機關に入つて來る當時の兒童がさうである〔即ち、個性の定まらない〕ものと期待してゐた狀態に迄及ぶのであります。が、此の時期に就てはあまり氣の利いた報告はありません。

（12）幼い人間は凡ゆる點で生れたばかりの小さい獸とよく似てゐますが、實際は幼い獸よりも不利な立場に立つて居るのであります。幼い獸は僅か數週間の短い期間だけ母獸の保護の下にあり、其の後は獨りで育つて行つて保護を受けないでも立派に成長して行ける獨立の存在になるのですが、人間の幼兒はさういふわけには參りません。先づ少くとも生後一年間は全然母親の保護の下に居て、ひとたび其の保護の手が緩められると直ぐに死んで了はなければならない有樣です。そればかりか、此の時期が過ぎ去つて了つた後でも、決して獨立の域に達するわけではありません。まだ〳〵何もわからず、食物を手に入れることも自己保存を行ふことも出來ず、危險に對して身を護る術も知らないのであります。

（13）皆樣も御承知の通り、幼兒が成人の保護から完全に離れて、自ら成長した個人になることが出

來る迄には殆んど十五年の歳月がかかります。

扨て、人間と獸類との此の相違點・即ち人間の子供はこれ程長い間完全な依存狀態に止つてゐなければならないといふ事情、が彼の將來の運命を決めるのであります。生後一ケ年の間、幼兒の生と死とは唯母親の優しい愛護によつてのみ距てられてゐるとすれば、此の愛護を失はないで保つて行かうとする努力がとりわけ重要な役割を演ずるやうになるのも格別不思議なことではありません。幼兒は母親が傍に居て吳れるうちは安心して居りますが、その姿が見えなくなると賴りなくなつて心配で堪らないと云ふやうな樣子をいたします。母親は食慾の滿足に是非とも缺くことの出來ない生存の必要物なのです。併し乳兒と母親との關係はやがて生命保全の爲の努力といふことで說明のつく限度を超えて了ひます。子供は食慾が滿されて了つた後でも、或はまた格別何かの危險を感ずるといふわけでなくても、母親が自分の身近に居ることを望み、彼女に向つて憧れを感ずるやうになつて參ります。これを私共は――「あの子は母親を愛し*てゐる*」と云ふ風に言ひ慣はして居りますが、母親の優しい、慈しみに滿ちた愛護に應へて幼兒の〔心〕のうちには彼女への愛

着が起つて參りまして、其の愛着は矢張り自己保存の欲望の方向を辿つては行きますが、實際は、最早や此の自己保存の欲望から獨立してそれ以上に出て了つて居るのです。

(14) 此の母親への愛着のお蔭で幼兒は充分心身の平和な發達を遂げる事が出來るのだと云ふ風に考へられます。母親が唯々自分を養ひ、面倒を見、愛して呉れさへすれば子供はすつかり滿足してゐるわけなのであります。

(15) 處が、此の邊で小兒と母親との間柄に外界が侵入して來て之を邪魔するやうになるのであります。乳兒期を過ぎ、生後一ヶ年を經過すると小兒は突然、母親が自分だけのものではないと云ふことを悟ります。つまり、自分は僅かに其一隅を――而も大して重要でない一隅を――占めてゐるに過ぎない、此の家庭のなかには自分の他にも父親だの兄弟姉妹だのと云ふメンバーが控へてゐるのだと云ふことが初めて彼の意識に浮んで來て、その上、斯うした人々の立場も自分のと同じやうに重要なものであるといふことが分つて參ります。彼等も亦母親を專有したがつて各々自己の權利を主張するのです。

そこで小兒は勢ひ、兄弟姉妹達を敵對的な氣持で眺めるやうになり、嫉妬心を起して、

自分だけに最も大きな滿足を與へて吳れた狀態、卽ちその昔の赤ん坊の時代を取戾す爲に、彼等が姿を消して了へばいゝと思ふやうになります。

（16）小兒のもつ斯樣な嫉妬の感情は、例へば、小さな弟なり妹なりが生れた時の子供の態度を觀察して見ると容易に之を理解することが出來ます。或る父親は、二歲になる少女に生れたばかりの弟を見せて、嘸大喜びで感嘆の聲を擧げて吳れるだらうと得意になつて待ち設けてゐた處が、其の兒は「これ何時また死んぢやうの」と聞いたさうです。また、或る母親の話によると、三歲になる男の兒が、赤坊が彼女の乳房を吸つてゐる樣子を見ると必らず、ステッキか何かの尖つたものを持ち込んで來て傷をつけようとする、これを止めるには並大抵の苦勞ではなかつたと云ふことであります。二・三歲の小兒が、眼を離してゐるうちに、幼い妹や弟に非道い負傷をさせて了つたやうな實例をまだ〳〵他にも聞いてゐます。

小兒の斯ういふ嫉妬心は充分愼重に考へて見なければならない事柄であります。抑々この感情は成人の嫉妬と同一の動機（モテイフ）から起つて來るものでありまして、それが爲に子供が經

驗する苦痛は、我々成人の生活に於て、愛する者との關係が好ましくない競爭者によつて妨害攪亂される場合に經驗する苦痛と同じ程度のものなのであります。唯一つ相異してゐる點は、小兒の行動範圍が成人のそれに比べて限られてゐる爲に、其の嫉妬感情の滿足は唯願望の領域内にのみ止まつてゐると云ふ事であります。卽ち、子供は自分の邪魔をする兄弟姉妹が居なくなつて了へばよいと思ひ、いつそ死んで了へばよいと願ひます。勿論死の意義と云ふものを未だ少しも認識してゐない小兒にとつては、眼の屆く所に居ないこと(Fortsein)と死んで了ふこととの間には、結局何の差異もないのではありますが。

兄弟姉妹に對する死の願望は、小兒にとつては極めて自然な現象でありまして、小兒が母親を所有することに大きな價値を認めれば認める程、益々激しいものになつて參ります。扨て、此の敵愾心は最初のうちは全然統一された(einheitlich)一つの感情となつて表はれて來ますが、軈て母親の愛が、不思議な事には、自分の妨げになる兄弟達にも及んでゐること、彼女に氣に入られようとするには自分の懷いてゐる腹立たしい願望を棄てゝ了(17)はなければならないこと、仲よく彼等と母親の所有權を分ち合ひ、なほ進んで彼等を愛

してやらなければならないといふこと等に小兒が氣付いて來ると、玆に初めて感情の葛藤が起つて參ります。兄弟姉妹間の感情關係を繞る總ゆる困難は實に此處に源を發するのであります。

皆樣方も、相當大きくなつた子供を觀察して御覽になつて、所謂「兄弟愛」なるものが多くの場合、單に成人の願望を表はすものに過ぎないことや、事の實相は斯樣な表面的現象の裏に深く潜んでゐること等を御承知であらうかと思ひますが、これは玆に述べる事實、卽ち、母親との關係の濃度が薄ければ薄い程、兄弟姉妹間の嫉妬心が稀薄になるといふ事情を明に證明して吳れるのであります。例へば、勞働階級の人々の間では、母親が殆んど子供の面倒を見てやる餘裕をもたないために、赤坊が生れても愛情が薄らぐやうなことも少いわけでありますから、從つて、無產者の子供達の間には中產階級の家庭に見るよりも遙かに大きな愛情と共感があるのであります。此の中產階級の家庭ではどの子もどの子もお互に、非常に現實的な專有慾を繞つて互の競爭者となるために、それに應じて憎惡と嫉妬心が公然と或は隱然と兄弟の間柄を支配することになつて參ります。

(18)

扨て、小兒が兄弟姉妹に對して懷くこの敵對的な感情も、實は、これよりもつと力強い、別種の感情葛藤の比較的無害な前奏曲に過ぎないのであります。抑々、小兒と母親の所有權を爭ふ者は、强ちその兄弟姉妹だけではありません。彼等よりも重大な父親と云ふ者が存在してゐるのです。但し、此の父親は、小さな男の兒の生活に於て二重の役割を演ずることになります。父親が母親の當然の所有者の如く振舞ひ、彼女を連れ去つたり、一緒に外出したり、彼女と二人きりで就寢したり、萬事につけて母親を自分の財產のやうに取扱つたりすると小兒は彼を競爭者として憎惡します。が、其の他の事にかけては、父親を愛し、讃仰し、その援助を期待し、彼の力量と全能力を信仰し、將來彼の如き人物に成ることを以て此上ない希望とするものなのであります。そこで小兒は、同一人を愛し尊敬し、而も同時に之を憎惡し、その死を希ふと云つたやうな、曾て經驗したことのない、克服し難い難關に突き當つて了ふのであります。兄弟姉妹との關係に於ては、たゞ、自分の腹立たしい願望を抑へつけておきさへすればそれで母親の歡心を買ふことが出來たのですが、今度は感情と感情との對立が起つて、その相剋の爲に彼は自分の腹立たしい願望の烈

(19)

しさに對する、また父親の復讐と愛情の喪失とに對する不安、母親との關係に於ける總ゆる氣安さと平和の破局等の懸念、罪障感（das böse Gewissen）、死の恐怖等に苦しむのですが、この事は一先づ皆樣の御想像に委せておいて、また他の機會に詳しく御話しすることに致します。

處で、皆樣方は恐らく斯樣な兒童の感情發展の經路を辿つてゆく事には尠からぬ興味をお感じになる事でせうが、扨て、こんな事が皆樣方の專門の御仕事にどの樣な關係をもつてゐるのかと云ふ段になると充分御理解がつかなくはないかと思ふのであります。皆樣方が世話しておいでになる子供達は、とうの昔に今申したやうな母親への完全な依存狀態を通り過ぎ、幼兒期の嫉妬やら感情の爭闘やらを卒業して來て了つた大きくなつた子供達ではないでせうか。處が、實はさうではありません。ホルトなり學校なりで皆樣方が見聞きなさる現象は其の實、此の幼兒期から發展した現象なのであります。喧嘩好きで、非社會的で、何事にも滿足しないと云ふやうな子供は、學校友達を自分の兄弟姉妹に見立てて、我家で解決してしまへなかつた（感情の）爭ひを彼等に向つて挑みかけてゐるに過ぎず、

またもう少し育つた子で、一寸でも抑へようとすると直ぐに烈しく反抗したり、或はその反對に、大變臆病で教室で先生の顏をまともに見ることは愚か、大きな聲を出すことすら出來ない者などは、畢竟、自分の父親に對する死の願望、或は苦心してその願望を抑壓した結果起る不安と屈從の感情を、先生であられる皆樣方に轉嫁してゐる迄のことに過ぎないのであります。

（20）

これで、最初皆樣方を驚かせた現象の説明がついたわけになります。つまり、六才の小兒ですら既に既成の反應性を備へてゐて、それを皆樣方に向つて繰り返すものでありまして、皆樣方の眼前に展開されて行く事共は、結局、殆んど皆樣方の感化を蒙らないまゝで殘存してゐる昔ながらの感情葛藤の再生であり、繰り返しであるに過ぎないわけになるのであります。

斯う申すと皆樣方は、また次のやうに反對なさるかも知れません。一體、只今迄に御話ししたやうな家庭などと云ふものは現實には存在しないものだ、少くとも皆樣方の取扱はれる子供達の大部分はそんな家庭から來てゐるのではない。子供達にそれ程優しい、心の

の籠つた愛情を注いでやつて、而もその愛情や保護を皆に公平均等に分配してやれる母親だの、妻とは飽くまで親密な間柄でゐながら、而も幼い息子の愛と讃美の對象になるやうな性質を備へてゐる父親などと云ふものはさう澤山ある筈がない。實際は大分これと異つてゐる。と、こんな風に批評なさるかも知れません。

が併し、私が斯樣な典型的家庭を持出したことには一つのはつきりした目標があつたのであります。つまり私は、一見惠まれた外的の環境に居ると考へられる小兒でも、この相剋する感情の葛藤の爲にどれ程困難な立場に立つものであるか、また、外部的條件が惡くなればなる程――卽ち此の家庭の畫面に陰影が加はれば加はる程、小兒の心理内に起る葛藤もまた激しさを加へて行くものであると云ふ事を皆樣方に如實に御說明申し上げ度かつたのであります。

(21) 今假に、子供が全然自分の母親の手で育てられずに、此の大切な生後一ケ年の間を乳母から乳母の手に渡るか、それとも何處かの托兒所であまり熱のない保姆の世話を受けて過すものとして見ませう。(斯樣な場合)幼兒期の現實的な感情結合を缺く事が、其の子供の

將來の生活全體に大きな影響を及ぼすものと考ふべきではないでせうか。或は又少年が自分の模範と仰ぎ、指導者と考へてゐる父親が酒呑みであるか、精神病者或は犯罪者であるとしたらどうでせう。若しさうだとすれば、父親と同じやうにならうとする努力——本來ならば教育上最も大切な補助的意義をもつ努力——が此の場合には子供を一路破滅に導くやうな結果になつて了ひます。

兩親が別居してゐて、お互ひに子供を自分の方に引寄せ且お互ひに相手に罪を塗りつけようとして鬩ぎ合つてゐるやうな場合には、子供の信頼といふものが、あまりに早く醒めた批判力のために押し潰されて、その結果彼の感情の發達が全面的に傷けられるのであります。

(22) 玆に(私は)別居してゐる兩親を再び結び合せようとして空しい努力を捧げて來た八才になる男の子の言葉を御紹介申し度いと思ひます。「お父さんが母さんを嫌つてゐれば、母さんも父さんが嫌ひになる。さうすりや、二人共僕のことを好きになれないし、僕だつて父さんや母さんが要らなくなつて、家中がつまらなくなつちやふよ。」斯樣な事態から

子供が導き出す結論は大體こんな具合に危険なものなのであります。子供はちやうど、雇主への信頼を失つて、自分の仕事に悦びを感じなくなつた破産會社の從業員のやうな行動に出て參ります。つまり、子供は彼の仕事、卽ち、正常な發達を止めて了つて、歪んだ情勢に應じて異常な反應を示すものです。

扨て皆樣、本日の私の講演は一先づ此の邊で終りといたしますが、要するに私は、人間の最も幼い時代に起つて來るいろ〳〵の事柄を、精神分析的方法の助けを借りて再生した姿に於て御聽取り頂いたわけであります。これ迄に敍べた個々の事柄に就ては、皆樣方の方でも、どの程度に信じてよいものか、或はまたどの程度迄は信じられないか等、いろいろ御考へもあらうかと存じます。

が、孰れにもせよ、精神分析は今申したやうな發見を行つて、一般人の注意を幼兒期の體驗と云ふものに向ける事に貢獻したのであります。最後に當つて一つの事件を御報告致しますが、之に依つて皆樣方は、斯樣な理論的考察から導き出された現實的な結果を御了解下さる事と思ひます。

其の事件と云ふのは、最近獨逸の或る裁判所で離婚訴訟事件の判決が下される事になりましたが、審理が進行して行く中に、この夫婦の間に出來た二才になる子供を何方に引き渡す可きであるか、と云ふ問題が起つてまゐりました。處で、夫側の辯護士の供述に依ると、彼の妻は色々の性癖を持つて居て、どうも子供の教育には不適當だと云ふ事であり、また一方妻の側の辯護士の言分は、其の子はやつと二つになつたばかりなのだから、教育といふ問題ではなくて養護してやるのが當然だと言ふ事でした。其處で論爭の中心點は(23)「抑々子供の教育は何時から開始す可きであるか」といふ事になつて來て、此の點に就て專門家の意見を聞く事になりましたが、この際參考意見を出した人々の中、精神分析派に屬してゐる者は一部分に過ぎず、他は大概在來の學派の人であつたにも拘らず、「兒童の(24)教育は出生第一日より始まる。」と云ふ答申が出來上つたのであります。若しこれが精神分析發見以前の出來事であつたならば、恐らくこれと趣を異にした結論が出てゐたことは疑ふべくもありません。

第二講　幼兒期の本能生活

—*Das infantile Triebleben*—

（1）　前回の講演で述べました事柄を皆樣がどのやうに御聽取り下さつたかは固より知る由もないことですが、皆樣方は恐らく私の話から二重の印象を御受けになつたことであらうと思ひます。

と申すのは、皆樣は先づ、夙うの昔から解り切つてゐる色々な事柄を、今更事々しく重みをつけて並べ立てたものだとお思ひになつた事でありませう。私が、現代を宛も、教師が兒童といふものを家庭から分離した孤立の人格として觀てゐた時代と同じものであるかのやうな誤つた考へを持つて居り、また、今日では皆樣の中の一番お若い方でさへ、何か困難な問題が起つて來る度毎に、先づ子供の家庭環境（das häusliche Milieu）を考慮に入れて、兩親が宜しくない感化を及ぼしてゐはしまいか、兄弟の間のその子の立場はどんな

ものであらうか、つまり總領であるとか或は中の子、或は末の子であるとかいふ立場がどんな結果を齎すか、と云ふやうなことなどに迄考へ及んで居られると云ふ事實を失念して居るのではあるまいか、と御感じになつたかも知れません。皆樣方は常々、學校での子供の態度行動をば其の子の家庭に於ける取扱方に照らして見て說明を與へようと努力しておいでになるわけでありますから、改めて私が講演を致す迄もなく、兒童の性格を其の子の家庭内での體驗に迄遡つて考へるといふ事は、夙くに實行されて居る筈なのであります。

（2）

また、このやうな單純な事柄を如何にも大げさに吹聽したものだと御思ひになつたかも知れません。つまり、私は凡ゆる場合に、幼兒の感情や行動に一々成人の感情行動の表現を當嵌めて解釋し、一般に大人の行動を言ひ表す場合に使ふ文句を用ゐて兒童の行動を敍述したのであります。例へば、子供が日頃兄弟姉妹と小競合ひをやるのを危險極まる死の願望に變へてみたり、或はまた、男の子が母親に對して持つ他愛ない、感傷的な氣持を、性的に女性を欲求する男性の性愛に飜譯したりしたわけです。父親と共同生活をして、其の強い力を常々感じて居る男の子が、父親の命令と自由の制限とに厭々ながら服從するの

は至極當り前の事なのに、私が御話した所に依ると、これには彼のシルラーがドン・カルロスの中で描いてゐるやうな父と子との相剋があることになつて居ります。(3)

以前にも皆樣は、精神分析なるものが、幼兒の感情狀態を、ギリシヤの昔物語にある父親を殺して生みの母親を妻にしたあのエディポス王の感情に譬へるやうな事迄やつてのけるのだ等と聞かされて吃驚りなさつた事もあらうかと思ひますが、此の私の講演は結局皆樣が精神分析に對して持て居られた先入觀念が、全然根據のないものではなかつたといふことを證明したに過ぎず、而も今度は皆樣方の經驗を土臺として左樣な觀念を一つの判斷に代へて了つたやうな事になるわけであります。

然し、私は精神分析の採る立場を玆で擁護しようとは思ひません。只、これに就ての最後の御判斷を今暫らく御猶豫願ひ度いのであります。(4)

扨て、前に申した通り、精神分析の考へ方と全く一致したあの獨逸法廷での判決に戻つて考へて參りませう。一體、出生第一日からの教育といふことは何を意味するのでせうか。今日迄その精神現象に就ては殆んど何も解つてゐなかつた、まるで幼い獸のやうな小

さい人間のうちには、教育すべき何ものかゞあるのでせうか。抑々此の場合教育活動は何處から仕事に取掛つたらよいのでせうか。

兒童の內的生活と周圍の人々との關係に就て私が述べて參つた所から推して考へますと、之に對する答は至極簡單なやうにも思はれます。

つまり、幼兒敎育の任務は、「兄弟姉妹及び父親に對する兒童の敵對的願望と、母親に對する愛欲（Gelüste）とを抑へつけて、それ等が實現されるのを防ぐ」ことに歸するやうであります。

が併し、一步突込んで反省して見ると、初期の敎育に就ての此の樣な定義は不充分であるばかりでなく、稍滑稽にすら思へて參ります。幼兒は成人の環境の中に投げ出された無力な存在であつて、此の環境をつくる人々の好意に賴つて辛うじて死滅を免かれてゐるのでありますから、幼兒の力といふものを周圍の者の力と同列に考へることは、必ずその子供の爲に宜しくない結果を生み出すのであります。子供は自分の危險な願望を實現する見込といふものを少しも持たないのであります。少年審判所や幼兒診療所で取扱つた例の中

には、事實男の子が母親に對して徹底的に――と申しても自分の身體的發達の程度に應じて――父親の役を勤めたり、また、少女が父親に依つて妻としての用に供されたこと等もあるにはありますが、斯樣な場合にも、これ程の並外れた願望實現を行つたものは、決して子供自身の力や精神力（エネルギー）ではなくて、自分自身の愛欲を充す爲に、それに呼應して來る兒童の願望を利用した成人の異常行爲が原因となつてゐるに過ぎません。現實生活に於ては、子供の攻撃に對して父親を庇ふよりも、父親の怒りに對して子供を護る方がずつと〳〵大切なのであります。

（5）斯樣な次第で出生後一、二年間の敎育の定義といふ問題は未だ釋かれたわけではなく、その內容も明瞭ではありません。そこで、もう一度例の判決に歸つて、兒童養護（Kinderpflege）と兒童敎育といふ二つの概念を比較研究して見たならば、或は之に對する答へを見付け出す上に新しい道が開けて來るかも知れません。

（6）養護の定義を下すことはさして六ケ敷はありません。兒童の養護とは、兒童の要求を充たしてやることであります。乳母は子供の飢を充たしてやり、身體を淸潔にしてやり――

尤もこの方は、子供自身の要求といふよりは寧ろ大人の希望によるものでせうが――安靜に、暖かにしてゐられるやうに計つてやり、怪我其他の生命を脅かす危險を防いでやります。つまり、子供の必要とすることは悉く實行してやつて而も子供からは何の返報をも求めない、これが養護であります。

（7）

處が、教育の方は必ず兒童から何物かを要求いたします。但し、玆で皆樣に過去現在を通じての種々雜多な教育の目的觀を一々御說明申上げてゐると私のお話の本筋から離れて了ふことになりませう。一體、教育者と言へば、兒童が所屬する成人環境を指すのでありますが、此の教育者は決つて、兒童を自分達の氣に入るやうな者に仕立てゝ行かうとします、從つて夫々の時代、社會的地位、社會階層、所屬の黨派等々に應じていろいろ異つた者に仕立てようと致すものであります。併し乍ら、此等の互に異つた目的の凡てに共通する點があります。それは、凡ゆる教育が、兒童を成人に育て上げる事、而も彼の環境を形成してゐる成人の世界と殆んど差異の無い成人に育て上げる事を以て目的としてゐるといふ點であります。從つて教育の出發點も明かになるわけで、孰れの場合でも教育は、子供

が成人と異つてゐる點、卽ち兒童性といふものを對象として始められるのであります。さうとすれば、初期の教育とは何ぞやといふ問に對する答は、

（8）『教育は兒童の本性、大人の言葉で言へばつまり子供の悪戯、と鬪爭するものである。』

といふ事になります。

子供の悪戯等といふ事はどんな教師でも教育者でも各々自分の觀點から眺めてもう十分知つて居るのだから、といふ理由で此の場合いろいろの例をお話しする事を差し控へてはなりますまい。

公の教育の場所で兒童が演ずる悪戯は僅かに事の眞相の微かな投影に過ぎません。子供の悪戯の特性は、乳兒の頃から約五歳位迄の間、終始その世話をして來た人々にしか解つて居りません。そこで試にさういふ人々に尋ねると大抵は次のやうに話して呉れます。『子供は手に負へない程向ふ見ずで、自分本位なものだ。自分の意志を遂行し、自分の望みを滿たす事にばかり專心掛つてゐて、其の爲めに他の者が迷惑を受けやうと受けまいと一向問題にしない。子供は汚くて、感じが悪くつて、どんなに氣味の悪いものでも平氣で

手摑みにするばかりでなく、口迄持つて行つたりするし、自分の身體に就ては恥しいといふ事を知らず、他人が隱さうとするものには好奇心を持ち、意地汚しで、撮食ひが大好きだ。それから、自分より弱い生物に對しては殘忍で、無暗に物品を壞し度がる。身體にもいろ〳〵惡戲をやる。指をしやぶつたり、爪を咬んだり、鼻腔をほじつたり、性器を弄んだりする。しかも、かうした惡戲を非常に熱心に夢中になつてやつたり、一旦或る願望を持つと其の滿足に向つて熱狂的に突進し、聊かの猶豫をも我慢する事が出來ない。』世の親達が語る斯樣な體驗談のうちには何時もきまつて二つの不滿の聲が際立つて聞えます。その一つは、一向に先の見透しがつかないこと、つまり、何か一つの癖をやつと矯正したかと思ふとまた別なのが代つて出て來るといふこと。今一つは、一體何故かういふ現象が起つて來るのか、兩親が手本を示すわけでは勿論なく、他所の惡い子供達とは一緒にならないやうに十分注意してゐるにも不拘、こんな有樣なのはどうした譯か、といふ不可解な疑問であります。

處で、皆樣方は、只今述べましたやうな兒童の特性の例證は要するに、客觀的な敍述と

いふよりも寧ろ不平を並べた公訴狀に過ぎないと仰言るかも知れません。併し抑々成人といふものは此兒童の特性に對して未だ嘗つて客觀的態度をとつた事はないのであります。過去幾世紀かを通じて教育は、兒童の觀察といふことになると、宛も、生徒の間に何か問

(9) 題が起ると初めから憤激して之に臨む嚴格な教師のやうな態度で臨んでゐたのでありま す。此の樣な教師は、調査研究がすつかり濟む迄は注意して有罪の判決を差控へて置くことを學ばない限り、事の眞相を闡明することも、前後の關聯を認識することも決して出來るものではありません。一體親達が數へ擧げる子供の『惡戲』なるものは、實は、いろいろの**特質**(Eigentümlichkeiten)の混亂・錯雜した堆積に過ぎないのですが、人はたゞ之に對して困つた〳〵と言ふばかりで何等施す術を知らない有樣です。

處で、親達ばかりでなく學問的研究も、今日迄は兒童に對して餘り客觀的な態度をとつて來ませんでした。在來の科學は、種々の假說を基として拵らへ上げた兒童の本質の構造

(10) 圖に當嵌まらないやうに思へる徵候は之を凡て抹殺否定して了ふことを以つて知識を得る手段としてゐたのでありました。玆に精神分析は始めて兒童の本質を判斷する際に從前か

ら用ゐられて居た種々の結論やら、假說やら、偏見やらから自己を解放したのでありま
す。そして其の代りに、今迄不可解とされてゐた諸々の惡戲が驚く程整然とした一つの有
機的全體に整頓され、故意にする異常行爲と考へられて居たものが、宛も人體の發育に於
て見るものと同じ樣な發展段階の必然的繼起である事が解つて參りました。斯くして、世
の親達の一つの大きな惱みに對する解答が與へられたのであります。
外部からの影響に依ることなく、一つの惡戲が他の惡戲に急速に解消して行く現象も、
此等の惡戲が決して兒童の憂ふべき偶發的な異常行爲ではなくて、運命的に制約された發
展連鎖の正常な一部分であると考へられる時、最早や不可解な謎ではなくなつたのであり
ます。
種々の現象の斯樣な體系の發見を導き出した端緒は、兒童が惡戲の對象とする身體の部
位が任意に選ばれたのではなくて、先天的に決定されてゐる一定の系列に從ふものである
といふ觀察でありました。
皆樣は、前回の講演に於きまして、子供の母親に對す愛着が、母親に依つて與へられる

最初の榮養と養護から起つて來ると申上げた事を御記憶なさつてゐると思ひますが、子供の惡戯も之と同じ動機に依つて、而も同じ場所から始まつて居ります。生後數週間の兒童の生活に於ては食物の攝取が生活上最も重要な役割を演ずるので、此の時期には身體中で口と其の周圍の部分が一番大切な場所となるのであります。母親の乳首を吸つて乳を體内に流し込むことは快感を與へますから、幼兒は滿腹して居る時でも此の快感を繼續し、また反覆し度いといふ願望を起します。そして間もなく、食餌の攝取とは關係なく、乳を與へて與れる母親とすらも無關係に、自分の指を吸つて此の感じを再現する事が出來るやうになるのであります。これを私共は子供が「おしやぶりをしてゐる」(das Kind "lutscht")と申しますが、其の時の幼兒の顏には、乳首を吸つてゐる時と同じやうな滿足げな表情が表はれるので、誰しも此の操作の動機が「よい氣持になる爲めだ」といふことを明瞭に了解するのであります。斯うして、最初は食物を攝る際の副產物に過ぎなかつた此のしやぶる快感は子供の大好きな、大人の嫌ふ獨立した操作、つまり、惡戯になつて了ひます。幼兒が口に依つて快感を求める操作は單に食餌を攝ることゝ指をしやぶることとに限られて

(11)

ゐるわけではありません。幼兒は自分の周圍にある凡てのものを口を通じて識らうとする樣な樣子を見せます。手の屆く限りの品物を咬む、甜る、味ふと云ふ具合で、大人達は其の爲めに子供を清潔にして置くことが困難になり、また其の結果子供の健康にも危險を及ぼす惧れがあるので洵に面白くないことゝ考へるわけであります。斯樣に、快感を獲る源として好んで口を用ゐる現象は大體生後一ヶ年間持續致します。

（12）

前に敍べました兒童に對するいろ〱の「苦情」を想ひ起して頂けば、その中に、丁度此の生後一ヶ年の頃から始まつて、相當の年齡迄續く惡戲、つまり撮食ひと大食とが數へられて居ることに御氣付きになる事でせう。

扨て、次に、口唇に代つて目立つ役割を演ずるやうになる身體の部位は體驗を通じて外側から決定されます。今——即ち、生後一ヶ年——迄は兒童を取り圍む成人の世界は彼に對して非常に寛大な態度をとり、專ら其の養護にのみ精力を集中して只或る程度食事や睡眠時間の統制と規律への習慣をつける事に意を用ゐて來たわけです。が、此の頃になると兒童の生活のうちには漸次一つの新たな要素が加はつてまゐります。其の要素といふの

(13)は、清潔にさせる躾けであります。母親や乳母は骨を折つて子供の寢小便や其の他の身體を不潔にする傾向を矯めようと致します。

併し、子供に此等の事を抑制させるわけには中々行かないので、生後第二ヶ年は先づ全然と申してもよい程、時には隨分な努力を拂つて迄此の方面の教育に捧げられる事になるのであります。

處で皆樣は、子供が清潔にすることを學ぶ迄に非常に長い年月が掛かるからと言つて、これを子供の惡戲といふ風に考へるのは當らないとお思ひになるでせう。子供の括約筋は何しろ未だ充分な發育を遂げてゐないのだから、膀胱に溜つてゐる尿を我慢してゐたり、排便をキチン〳〵としたりするわけには行かない筈なのです。成程清潔教育の初期には此の說明でも間に合ふかも知れませんが、後になつて來ると私共は自づから是と異つた印象をもつのであります。

よくよく觀察して見ると、どうも子供は身體を清潔にして置くことが出來ない譯ではない、唯自分の思ふまゝに氣の向いた時に排便したがり、自分の身體の產物である便を斯樣

に思ひのまゝにする權利を奪はれ度くはないのではなからうかと考へられます。子供は自分の便に對して著しい興味を示します。便をいぢつたり、弄んだりするばかりではなく、うつかりして居ると口の中に入れたりさへしようとします。此の場合の子供の表情や其の熱心さを見れば斯樣な振舞をする動機が容易に判斷されます。つまり子供は此の爲めに快感を覺えるのです。處で、此の快感は、最早膀胱や肛門の括約筋の強弱とは何の係はりもありません。乳兒は、乳を呑む際に副産物として口の周圍に快感を覺えたやうに、今度は排便作用の副産物として、肛門に快感を覺えるのであります。そこで此の時期には肛門の周圍の帶域が身體中で一番重要な部分となつて參ります。榮養とは無關係に、指を甜めて自分で口唇の快感を産み出さうと力めたやうに、子供は便を耐え此部分を弄んだりして同じ結果を得ようとするのであります。そして此の操作が教育に依つて極力脅迫されると子供は砂遊びや水いぢり、泥いじり等に依つて、又後になると繪具を塗つたりすることに依つて、嘗ては非常に貴重なものであつた此の快感のせめてもの名殘を留めようとするのであります。

成人は此の時期の兒童が汚らしくて、見るからに厭な氣持を起させるなどといつも叱言を言ひながら、そのくせ「何といつてもまだ小さくつて、智慧がついてゐないし、美的觀念も充分には發達してゐないのだから、清潔も汚いもゴッチャで區別できないのだ」とか、「嗅覺の訓練が不足だから芳い香りと惡臭の相違が分らないのだ」とか言つて之を大目に見てやらうとする傾きがあります。私から見れば、これは、兒童を觀察するものとして抑も偏見に囚はれた誤謬に陷つてゐるものであります。試みに二才位の幼兒を注意深く觀察して見れば、その嗅覺が正確であることは誰れにでも明瞭に分る筈です。成人と異る點といへば唯その評價にあるのです。例へば、成人には大層好い匂ひだと思はれる花の香りでも、その香りを嗅いで「あゝいゝ」と嘆息するやうに仕込まない限り、幼兒には何の意味をももちません。また、私共にはイヤな匂ひだと感じられるものでも小兒にはイヽ匂ひのこともあります。勿論、兒童が惡臭を悦ぶことを惡い習慣の一つに數へるのは成人の勝手なのですが。

兒童のこれ以外の特性を考察して見ても、やはり此の種の關係が認められます。例へ

(14) ば、兒童の殘忍性といふことは昔から著しい事實として擧げられて居りますが、その說明は單に子供の無智といふことだけに止つて居りました。兒童が甲蟲や蠅の足を捥いだり、翅をむしつたり、小鳥を殺したり、非道い目にあはせたり、或はまた玩具や日用品を打ち毀したりするのは、結局生物に對する同情能力（Einfühlungsvermögen）が缺けてゐるためであり、また物品の金錢的價値といふものが理解出來ないためなのだとして寛大に取扱はれて居つたのであります。けれども、私共の觀察は此の點に就ても異つた說明を與へてくれます。私共の見るところでは、小兒が動物を苦しめるのはさうすることによつて彼等に苦痛を與へることが理解出來ない爲ではなく、却つてさうする事が正に苦痛を與へる所以(15) であり、またその目的の爲には全く無防禦の甲蟲が一番手頃で、危險性の無い生物だといふことが分つてゐるからこそやることなのであります。品物を毀す場合にしても、毀すときに經驗する快感のためにその品物の實用的價値が全く忘れられて了ふのです。指を恬つたり、汚物をコネまはしたりする時と同じやうな表情を示して、熱烈に斯うした仕事に沒頭してゐる兒童の様子を見れば、此等の行爲の動機は容易に推察することが出來ます。つ

まり、此處でも快感が問題なのです。清潔教育が完全に行はれて、兒童が自らの抵抗に逆つて排便作用の制禦に慣らされて了ふと、肛門の周圍の帶域も快感を獲る手段としての意義を喪失し、新たに、もつと重要な部分がその代りをつとめることになります。卽ち、小兒は自分の性器を弄びはじめるのであります。此の時期になると小兒は自分の身體と、兄弟姉妹或は遊び仲間の子供達の身體との相異を知りたがり、性器を露出してこれを他の子供達に示し、その代償として彼等のものを見せて貰ふといふやうなことが面白くなります。また、兩性の差別と、これと暗に結びついた赤坊の出生といふことに就て熱心に質問して成人を困らせます。ちやうど此の四才から五才の頃に兒童がいろいろの方面から達する發育の全盛期は、敎育の任に當る成人から見れば、まさに手のつけられない困つた時期でもあるのです。

斯樣に兒童は、玆に述べました發達の全過程を通じて自己の快樂を滿足させ、本能的の(16)願望を遂げることが此上ない重大な仕事であるかのやうに振舞ひ、また敎育の方では此等の目的の遂行を妨碍することが最も緊急を要する課題であるかのやうに心得て居るやう

で、そのために、教育者と兒童との間には絕間のない、しかも決して落着することのない小競合が起るのであります。教育者は、兒童が汚穢を娛しむ傾向を不快感で、無恥を羞恥心で、殘忍性を同情心で、激烈な破壞欲を勿體ないといふ感情で、夫々置き換へようとし、彼等が身體に對してもつ好奇心と働き掛けとを禁止によつて克服し、向ふ見ずを愼重さに、利己主義を利他主義に換へようとします。かうして教育は一歩一歩兒童の要求と正反對のものを求め、彼等の衝動激發の反動を以てその目標とするのであります。兒童にとつて快感の獲得が生存の主要目的であることは以上述べた通りでありますが、これに對して成人は斯樣な內部的衝動の要求よりも、外界からの要求の方を重要視するやうに教へ込まうと致します。處が兒童の方では、とても我慢が出來ないで、一向落着かずただ其場限りを注文通りにするのみにすぎません。成人は衝動の滿足を取除いて將來の計をたてるやうに教へるのですが。

(17)偖て、私のお話し申した所によつて、例へば指を甜つて快感を得る操作と、性器を弄ぶ、つまり自慰を行ふことによる快感獲得との間には何等の本質的差異も認められないと

(18) いふことに御氣づきになつたと思ひます。事實、精神分析の立場からすればそのやうな差別はあり得ません。只今申し上げたやうな快感獲得行爲は幼兒の衝動滿足を目的とするものであつて、それがよし性器そのものに就て達成されやうと、或は口唇乃至は肛門の帶域で行はれやうと、それには係りなく、凡てを一括して精神分析の方ではこれを性的なもの

(19) (das Sexuelle) といふ概念の下に包括して居るのであります。つまり、四才から五才の頃の兒童に於て、性器帶域が演ずる役割と、生後一ケ年の頃に口唇が、また二才の頃に肛門が演ずる役割とは全く同じものなのです。一體性器帶域は、それが最も重要な役割を勤め

(20) る成人の性生活から推しはかつて見れば、口唇や肛門よりも遙かに重大な意義をもつてゐるわけですが、それはその通りとしても、なほ幼兒期の快感帶域(即ち、口唇、肛門)の意義が失はれて了ふことはありません。此等の帶域から快感を得るといふことは、いはば、本格的性行爲の準備的豫備行動なのです。

處で、小兒が最初の快感を獲得する帶域がその成人となつた曉の性生活に於て、たとひ副次的であるとはいへ、或種の役割を演ずるといふ事實だけを擧げたのでは、此等の帶域

及びそれによる快感獲得行爲を直ちに性器乃至性器による（正常）の性行爲と一般に性的であると決めて了ふ根據としては不充分だと思へるかも知れません。が、精神分析は、またこれ以外の事情から推して、斯かる分類の妥當を裏書きするのであります。例へば、以上に述べて來た幼兒的衝動滿足法のどれか一つが、成人の生活に於ても性器帶域の下位に立つことを肯せず、飽く迄主導的な立場を執りつゞけて、性器帶域の役割を奪ひ、性感の滿足をこの特殊な場所によつてのみ求めるといふやうな異常な場合があります。一般に斯様な異常者を變態者（Perverse）と申しますが、その特徴とする所は、彼等が生活の最も重要な一部面である性生活に於て幼兒期の段階に止まりつゞけてゐるか、或は何かの機會にそこ迄逆戻りしたかにあるのであります。で、成人の性生活に於ける此の種の界常現象を理解すれば、抑も敎育が何故あれ程迄に、幼兒の發育期を通じて彼等の衝動滿足の發動を防ぎ止めようと努力するかゞ而めて理解できることゝ思はれます。

(21)

小兒が通過しなければならない發展の諸段階は、言はば、豫め定められた終點に向つて旅を續けて行く途すがらの停車場のやうなものであつて、若しもそのうちのどれか一驛に

(22)に停車したまゝ動かないでゐるとやがて、其處に停滯して了つて、それから先の旅、つまりそれ以後の發育を止めて了ふやうな危險が起つて參るのであります。

處が、斯樣な見解が未だ學問的に充分基礎づけられないずつと以前から、どの時代の敎育者も此の危險をよく承知して居つて、兒童が所謂最終の段階に達して了ふ迄は、途中で道草を喰つて、どこかで滿足したり、定着したりしないやうに、即ち發育の段階を眞直ぐに登りつめるやうに取計ふのが自分達の使命であると考へて、いろ〳〵苦心して來たかのやうに見受けられます。此の恐るべき幼兒の快感獲得行爲と抗爭する爲に敎育がその昔から採用して來た方法は二種類ありますが、その一つは「甜るのをやめないと親指を切つて了ふよ」などと警告する方法で、乳母や繪本があらゆる機會にあらゆる形式で用ゐて來た(23)脅迫法であります。此の方法を用ゐて成人は、實際に暴力でもつて大切な身體の一部分を傷けられて了ふのではないかといふ恐怖心を兒童に起させ、その結果此の部分から快感を獲得しようとする試みを斷念させようとするのであります。今一つの方法は、「そんな事をするともう可愛がつてやらない」と脅す遣り方で、此の場合兒童は、兩親の愛を喪失す

るかも知れないといふ危險に曝されることになります。斯うした脅迫的教育法は前回のお話で述べたやうな幼兒の特殊な立場、つまり強力な成人の世界に伍して全く賴るところの無い、無力な、兩親の愛に絕對的に依存する外はない立場に應じて效力を發するのであります。

此等の方法は兩つながら同等の效力を現はし、兒童は壓倒的な危險に脅かされて、當初の目的を抛棄するやうに訓へられます。尤も最初のうちは、成人に對する恐怖乃至は愛のために、自分の態度を改めるが如く裝ひ、自分には善いと思へることをも惡いと思ひ、不愉快と見るやうにつとめる程度ですが、追々成人と同化して行くに從つて、此の(後天的)價値觀を眞實に認め始め、以前に感じてゐたことを忘れ、幼兒期に欲求したことを否定し、遂にはその昔の感覺的滿足に關聯してゐた諸感情(Gefühle)を完全に逆にして了つて、その昔の狀態への後戻りを防ぐやうな結果になつて參ります。斯樣な變革が完全に行はれれば行はれるだけ成人は自分等の敎育活動が成功したと考へて滿足するのでありま す

（24）成人が兒童に強制する幼兒的衝動に基く快感獲得行爲の拋棄は、兒童の精神の發育の上に二つの意義深い結果を齎します，第一は，自分が受けた強制的要求を逆に外界に向けて發するやうになること、と申すのは、一生を通じて、自分と同じ道程を辿らずに依然幼兒的な帶域から快感獲得行爲を營んでゐるすべての者を容赦しないやうになつて了ふのであります。此樣な者に對して彼等が感ずる道德的義憤は、私共から見れば、彼等自身がその昔の子供時代にやつて來た衝動抑壓の度合を計る尺度に外ならないのであります。

斯樣に、幼い頃あれ程好んでゐた快感の體驗を捨て去つて了ふと同時に、それに關聯した時代のすべての感情體驗をも記憶の埒外に驅逐して了ひます。回顧すれば、唯不快な、

（25）不甲斐ないものに過ぎない過去を忘れて了ふのであります。そしてその結果、重要なるべき幼兒期の體驗に關しては前に申したやうな一見不思議の感を起させる記憶の喪失・不透明・缺陷が生ずるのであります。

第三講　潜在期

—Die Latenzperiode—

（1）私は二晩の間に亘つて、極く幼い兒童の感情の狀態だとか、その本能の發展過程だとかいふやうな、皆樣方から御考へになればむしろ母親や乳母、或は精々幼稚園の先生方にとつて直接的な意義をもつ問題に就ていろいろ申し上げ、皆樣の御專門の領分とは大分かけ離れたことばかりをお話しして參つたわけになりますが、併し、たとひ斯樣な材料を選んだからと云つて、私が皆樣のお取扱ひになる大きくなつた子供達に纒る諸問題を輕視してゐるといふ意味には御考へにならないで頂き度いと思ひます。元來私は、今回の講演を通じて皆樣方に精神分析の根本的諸概念を御紹介することを目的として居るのですが、此等の概念を明瞭に浮き立たせて展開して行くためには、どうしても幼兒期にのみ見出すことの出來る特定の資料が必要になつて來るのであります。

そこで、わざ〳〵大變な廻り道をして參つたわけですが、此の廻り道を致した理由を補足的に御說明するために、皆樣が今日迄に御聽取り下さつた種々の事實を通じて精神分析の原理に就て何を御學びになつたかを玆に一々吟味して見ることに致しませう。

先づ、皆樣方は、私の報告の最初に於て、人間は自己の內的生活のほんの一部分を識るに過ぎないものであつて、自分自身のうちに働く感情や思考の大部分のものに就ては一向に關知する所がない、つまりそれ等のものは意識面に上ることなく、無意識のうちに進展するのである、といふ主張を御聽きになりましたが、その時皆樣方は、「何もそんなに慾張ることはあるまい、一體、內外から押し寄せて來る夥しい刺戟を受けとつて消化する人間が、その一つ一つを悉く意識のうちに留めておくといふやうな事は出來るものではない、自分にとつて一番大切な事だけを覺えておけばそれで充分ぢやあないか」とお感じになつたかも知れません。が併し、誰の幼兒期にも之を覆ふ大きな記憶の間隙があるといふ實例の前には此の觀方の根據も薄弱になつて來るやうです。或る事柄が重要であるといふことは、必しもそれが永らく記憶に留められるといふ保證にはならないのであつて、却つ

て最も意義の深い印象がきまつて記憶から引き離されて了ふといふことを此の實例が示して居ります。また、經驗の示す所によれば、斯樣に潛行して了つた我々の內界の一部分は、記憶から消え去り乍らも、その作用力（Wirkungskraft）は之を保留しておくといふ奇怪な特性を備へて居つて、此の作用力が幼兒の生活に決定的な影響を及ぼし、彼と周圍の人々との間に種々の關係をつくりあげ、また幼兒の日常の擧動のうちに姿を顯はして來るのであります。皆樣の御想像なさつてゐた所とは全然異つた、此の幼兒期の經驗の二重性格――卽ち、闇黑のうちに消失しながらその影響力を毫も失はないといふ特性――に御注（2）意下されば、精神分析の所謂無意識（das Unbewusste）の概念が明瞭に御分りになることゝ思ひます。

また皆樣は、重要な印象の忘却される過程に就てもお學びになる所がありました。兒童は恐らく、自分の最初の此上もなく大切な願望衝動や本能の滿足等をよく記憶して置き度いと希ふことでありませうが、それにも拘らず、外部からの壓力に服從して、此等の追憶に背を向け、精力を費して之を逐ひ斥け、そのことに就ては一切知らないことにして了は

う と致すのであります。これを、私共は「子供が(さうした記憶を)抑壓する(verdrängen)」と申します。處が教育は、前回にも御話した通り、此の兒童自らが達成した抑壓作用だけでは滿足せず、これ程迄に苦心して底の方に押し込んだ諸々の特性が何か都合のよい機會を狙つてまたぞろ頭を擡げて來はしないかといふことを懸念して、教育的に見て惡習慣と考へられるものを兒童から引き離しておいて、更に到る處に閂をかけてそれらのものの再起を防壓することに腐心いたします。その結果前に御話ししたやうな本具の感情や特性の逆轉が起つて來るのであります。例へば、二歲位の幼兒が自分の糞便を口に入れたがると(4)します。此の子は教育の壓力によつてそのやうな行爲が汚らはしいものであることを知り、初めに懷いてゐた願望を拋棄するやうになりますが、それればかりでなく之を嫌惡することも敎へられます。

そして、大便を弄んだりすると嘔吐を催し、何か吐き出したくなるのであります。これは明かに、何ものかを口に入れようとする最初の目的の反動と見ることが出來ます。斯樣にして、口唇を用ゐてそのやうな行爲をすることは、此の嫌惡感のために不可能にされて

了ふのであります。幼兒期の本能的衝動と鬪爭して反動的に生じて來る此の種の後天的特

（5）性を精神分析では反動形成（Reaktionsbildung）と呼ぶことに致して居ります。そこで、大人になつてから異常に強い同情心をもつやうになり、或は、特別內氣であつたり、或はまた何かと云へば直ぐに胸がわるくなつたりする兒童は、幼期に於て特に殘忍であり、或は無恥・不潔であつたと考へて差支ありません。昔の習慣に逆戾りしない爲には、是非とも強力な反動形成が必要になつて來るのでありますから。

但し、反動形成の形式によつて或る習性をその正反對なものに轉向させるといふことは、兒童が何かの特性を廢棄する一手段に過ぎないのであつて、なほ此外にも望ましくない活動をより望ましいものに變へて行くといふ行き方もあります。これに就ても前に一例

（6）を御紹介しておきましたが、例へば自分の糞便を弄んで娛しんだ兒童は、教育者の叱責を免かれる爲に必しも此の快樂を全面的に棄てゝ了ふには及ばないのでありまして、便と尿の代りに砂と水を使つて遊ぶとか、機會が與へられゝば砂地に何か建てたり、庭に花壇をこしらへたり、堀割りを掘つて見たり、或はまた女の兒がやるやうに人形の着物を洗濯す

ることを覺えたりして代償的滿足を得ることが出來るのであります。また、物を汚染する快感は、繪具や色チョークを使つて繪を描く仕事に之を移して繼續することが出來るといふ風に、兒童は此等の社會的に許容されてゐる、時としては有用でさへある活動に從ふことによつて夫々幼い頃に味つた快感の名殘りを享受するのであります。斯樣に、本能的衝動が洗練され、教育的に見てより高次の目標に向つて誘導される現象を精神分析では昇華（Sublimierung）と申します。

（７）處で、皆樣方は前二回の私の講演のうちから、精神分析の二三の根本概念の定義以外に、なほそれ以上のものをお學び下さつたわけであります。それは、兒童の感情生活のうちに一定の觀念の聯關、即ち觀念の環或は觀念の複合體（Vorstellungskreis oder komplexe）

（８）とも云ふべきものが著しい役割を演ずるといふ事實であります。此の觀念複合體は或る特定の時期に優勢になり、次いで抑壓され、成人の意識內には表向きは見出されなくなつて了ひますが、兒童がその兩親に對してもつ關係も此の種の觀念複合體に外ならないのであつて、精神分析では御聞きの通り此の關係の裏にエディポス王の所業の根柢に橫はる動機

（9）と願望とを發見して、之にエディポス・コムプレクス（Oedipuskomplex）といふ名稱を與へて居ります。

教育が兒童を服從させる爲に用ゐる脅迫の効果も同樣に斯樣なコムプレクスを造りあげます。此の種の脅迫の內容は、よしんば暗示されただけにせよ、手とか舌とか或は男根とかの身體の大切な一部分を切り取つて了ふといふことにあるところからして、精神分析で（10）は此のコムプレクスをカストラチオーンス・コムプレクス（Kastrationskomplex）と名付けることに致して居るのであります。

尙ほ皆樣方は、私の講話の極く最初のところで、兒童が斯樣な初期のコムプレクスを、殊に兩親との間の關聯に於けるそれを體驗する仕方が彼の後年の體驗全般の雛型になるものだといふことを御承知になつたわけですが、此等の幼兒期に體驗した愛と憎惡、反抗と服從、不實と信實と云ふやうなものを後になつてからもその頃と同じ型で反覆したいとい（11）ふ強迫的な衝動が兒童の內部に起つて來るのであります。兒童が斯かる內部的衝動に驅られて、その愛情のつながりや交友關係或は職業的環境などを迄、既に下積みになつた筈の

幼兒期の體驗と可及的に同樣な新版として實現されるやうな仕方で選擇するといふことは彼の後半生にとつて決して無意義なことではありません。先に生徒と教師との交渉の實例(12)を御話した際御覽になつたやうに、兒童は此樣にして過去の感情の態度(Gefühlseinstellung)を現在の人物に轉嫁する(überträgt)のであります。その場合、謂ふ所の感情轉嫁を可能ならしめる爲に、彼が此の現實なるものを屢々見謬り、自分に都合よく解釋し或は之を無理に歪曲することは申す迄もありません。

さて世上には、精神分析は性的といふ概念を從來用ゐられてゐる限界以上に擴充してしまつて、全然無害な、性的などとは思ひも寄らないと考へられてゐた幼兒の活動にすら性的なる名を與へると評する人が尠くありませんが、これ迄の私の話を御聽取りになつた所によれば此の批評は裏書をされるわけになります。人間の性本能は十三歳から十五歳の頃、即ち所謂靑春期に突然醒る、といふやうな今日迄皆樣方が親しんで來られた學說に對抗して、精神分析は此の本能が總ての發育の開始期にある兒童のうちにすでに働くものであつて、一つの型態から他の型態へと漸次移行し、一つの段階から次の段階へと進展をつ

ゞけ、永年に亘る發展過程を辿り辿つた揚句成人の性生活になつて現れるのであると主張いたします。しかも、此等の種々相の全體を通じて働く性本能のエネルギーはその性質に於て恒常不變であり、たゞその時々に應じて量的に變化するに過ぎません。此のエネルギーを精神分析の術語でリビドオ（Libido）と申して居ります。兒童の本能發展に關する此の學說こそは、新興科學たる精神分析の最も重要な部分をなすものであると同時に、それが唱へられ出した當初から多くの論敵を得るやうな結果にも導いたのであります。皆樣方のうち大多數の方々が今日迄分析の學說を危險視して敬遠して居られたのも此處に理由があつたわけであります。

（13）

まづ此の程度で皆樣が御學びになつた精神分析の原理的知識の概括を了へてよからうかと思ひます。これで精神分析の根本的な概念と其等に與へられた名稱の多くを大體御承知になつたわけであります。無意識、抑壓、反動形成、昇華等の概念、轉嫁の現象、エディポス・コムプレクスとカストラチオーンス・コムプレクス、リビドオの概念、幼兒期の性本能の發展の說等、斯樣に展開されて來た諸々の概念はこれから私共が手をつけようとす

る兒童生活の第二の時期の探究に大いに役に立つてくれることゝ思はれます。（14）

さて此の邊で再び兒童生活のことに戻つて、前回の終りあたり、つまり五歳から六歳の頃を振出しに御話しして參ることにいたしませう。此の年頃になると子供は公の教育機關に預けられることになりますから、從つて此の五六歳の頃が大いに皆樣の御關心を促す時期といふわけであります。

自分達の所に集る子供達は皆出來あがつた人間になつてゐると幼稚園や學校の先生方が訴へられることは最初に申した通りですが、此の不平は一體どういふ意味をもつのか、これを今迄得た知識を土臺にして調べて見ますと、兒童の內部情勢といふものが分つて見れば此のやうな感じが起るのは蓋し當然なのであります。幼稚園乃至は學校に入つて來る兒童はそれ迄の間にすでに深刻な感情的體驗を澤山に積んで來て居ります。生來の自己本位性は、特定の人物への愛情、此の人物を所有したいといふ激しい慾求、また競爭者の死を願望することと嫉妬の爆發とによる（愛する人への）所有權の擁護、によつて矯められて來ます。また彼は對父親の關係に於て尊敬とか讃美とかいふやうな感情を知り、自分より

も強力な競爭者と爭ふ苦しみを感じ、或はまた愛を喪つた者のやるせなさを味はつて居ります。その上に彼は此頃迄に既には複雜した本能發展の過程を經て來て居り、自分自身のうちに起る葛藤に直面しなければならない時の辛さをよく承知してゐるのであります。そして教育の壓力の下に非常な不安を惱み、自己のうちに種々の大きな變化を完成して參つたのでありますから、斯樣に過去の重荷を負つてゐる以上兒童は決して白紙どころの沙汰ではないと申さねばなりません。實際、彼の內部に起つた變化といふものは驚くべきもので、動物の樣に一人立ちのできない、周圍の人々にとつては堪え難いやうな（不潔）な代物が、兎に角多少理性的な人間になつたわけなのであります。

そんな次第で、いよ〳〵教室へ入つて來る頃の學童は、自分はもはや多勢のうちの一人に過ぎないのだから、今後は何の特別な取扱ひをも期待することは出來ないのだと覺悟して來る、つまり聊か社會に順應する性質を學んで來るのであります。以前のやうに絕えず自分の慾求を滿たさうとつとめる代りに彼は自分に要求される事をしようとし、たゞ許された自由な時間の間だけ快樂を追求しようと心掛けるやうになります。また、何でも彼で（15）

も見たがつたり、自己の環境の奥の奥の秘密迄捜ぐり出さうとする興味は知識慾と學習慾に代り、啓示と說明を求めてやまなかつたものが文字や數字を覺えようとする努力に代つて參ります。

斯う申すと皆樣ホルトの先生方は私が兒童の大人しさを餘り誇張して居りはしないか、ちやうど先達ての御話のなかでその惡戲性を極端に强調したやうにあまり仰山にお話し申して居るのではないか、とお考へになるかも知れません。そんな良い子供に會つたことがないとお感じになるかも知れません。が、現在の狀態では兒童ホルトに收容される子供達といふものは、內部的或は外部的の何かの原因のために幼兒期の教育を完全に了へてゐないものばかりだといふことをお忘れにならないで頂きたい、普通の學校の先生方ならば、大部分の生徒が私の申した通りの子供であつて別に誇張でも何でも無いことを充分認めて下さることゝ思ひます。

これこそ實に教育活動の實際の可能性と影響力の有力な證明にならうと思はれます。一

(16) 般に、幼兒期の教育に效果を擧げることの出來る兩親、つまり泣蟲で世話の燒ける汚らし

い赤坊を行儀よく教室の座席に坐る學童に育てあげることに成功した親達は自分達の手柄を誇りとして差支ないわけであります。全く廣い世間のうちでも、これ程の變化が完成される場面と云ふものは極く少いのですから。

併しながら、此の兩親の教育の結果といふものを評價する際に、若し次に述べるやうな二つの考慮が必要とされることがなかつたなら、私共は恐らくその功績をなほ一層讃美することが出來たかも知れません。その二つの考慮すべき事柄のうち第一のものは、觀察を進めて行くと諒解されます。三歳から四歳位の子供達と交つて一緒に遊んでやつたりする機會をもつ人ならば、誰しも、彼等兒童の幻想力の豐かさ、視野の廣さ、理解方の鮮明なこと、そして質問をしたり結論をつけたりする場合の確かな論理、等に驚かされるのですが、その同じ子供達が學齡に達すると、彼等に接する大人達の眼から見て、何となく間が拔けてゐて平板であまり興味を惹かないやうに見受けられるやうになる、そこで人々は一體あの幼い頃の怜悧な獨創的な性質はどこへ行つて了つたのだらうかと不審を抱くのであります。が、精神分析の教へるところによれば、兒童の此等の才能は、彼に向つて加へら

(17) れる要求に對抗し切れなかつたのであつて、五歳を過ぎる頃には殆んど消え失せて了つたも同樣になるのであります。

(18) 兒童をおとなしい子に育てあげるといふことは、慥かに或程度の危險を伴ひます。といふのは、そのために必要ないろ〳〵な抑壓や、反動形成や、或は昇華を實現するためには相當の値を拂はなければならないからであります。兒童の獨創性（Ursprünglichkeit）は、多量のエネルギーや賦才（Begabungen）と共に犧牲に供されて了ひます。それ故、大きくなつた子供が幼兒に比較してイヂケた、不活潑な印象を我々に與へるとしてもそれは當然なことで、彼等の思考力に加へられる制限や、彼等の性來の活動を沮む障害物やは聽て思考力の狹隘となり、行動力の障害となつて現はれて來るのであります。從つて、此方面では兩親も自分達の仕事の成果に就てあまり得意になるわけには行くまいと思ひますが、また別の方面から考へて見ても、將して親の功績を大いに認めてよいものかどうかは疑問であります。と申すのは、第一に、大きくなつた子供のおとなしさといふものは抑々教育の結果出來あがつたものであるのか、或は單に自然の發展の結果であるのか、その點に就て

は未に判然とした證明があるわけではなく、一體、幼兒を自然の發育に任せて置いたならば、將して小さい野蠻人が出來るものか、或はまた何等外部的な助力を俟たないで獨力で變化の階梯を登つて行くものか、といふ問題を決定する據り所は今のところ發見されて居りません。教育が種々の方面から活溌に兒童に影響するといふことは明白な事實であつても、幼兒を取卷く成人達がその働きかけを全然中止した場合にはどんな事が起るかといふ問題は未だに解決されてゐないのであります。

此の問題を闡明するために精神分析の方面では一つの重要な――併し、不幸にして中絶するに至つた――試みが企てられました。それは一九二一年（大正十年）にロシアの女流分析者ヴェーラ・シュミット夫人（Frau Vera Schmidt）がモスクワに設立した、一歳から五歳迄の兒童三十名を收容する兒童園の事業であります。夫人が此の施設に與へた「子供の家研究所」（K nderheim-Laboratorium）といふ名稱を見ても、此處に收容されてゐる兒童の小グループであることが分りますが、シュミット夫人の目的は、之が一種の學術的研究機關ープを學問的訓練を受けた女性の教育者達をもつて圍繞し、此等の教育者をして彼等の感

(19)

情及本能の種々なる表現を仔細に觀察させ、また彼等の內奥に生起する諸々の變化に對して助成的・誘發的に、而も出來るだけ妨害的にでなく、働きかけさせようといふ所にあつたのであつて、此樣な探究を續けて行けば、幼兒期の間に展開されて行く諸々の樣相といふものが、何等直接の敎育的影響を蒙むることなしに自然に現はれ且消え去るものであるのか、兒童は將して、格別强制される迄もなく、一定の時期を經過すれば快感獲得行爲や、その源泉となるべきものを自ら進んで拋棄して、新たな段階に移つて行くものかどうかが明瞭に決定され得ることになるのであります。

併し此のシュミット夫人の「子供の家研究所」も軈て外部的な困難に遭遇して、唯一人の兒童の場合を除き斯樣な折角の新しい敎育的試みを最後迄遂行することが出來ないうちに幾許もなくして挫折して了つたので、初期の敎育が幼兒の抑壓實現にどれほど役立つてゐるかといふ問題は、なほ一層良好な條件の下に再び斯樣な試みが企てられない限りは、未解決の儘殘つてゐると云はなければならないのであります。

が併し、此の抑壓實現の現象を兩親の敎育の效果と認めるか、或は單純に、一定の年齡

段階に夫々必然的な特徴と見做すか、その決定は暫く措くとしても、幼兒期本能衝動の壓倒的勢力は五歳から六歳の間に次第に經過し去つて行くといふことだけは觀察の結果明かであります。激しい感情表現や本能的願望の高潮點は四歳乃至五歳の頃を以て已に經過されて了ひ、兒童は次第に一種の沈靜狀態に入つて參ります。これはちやうど、獸が生れ落ちてから性的に成熟する迄絕えず發育を續け、成熟し切つて了ふと最早凡ゆる變化の可能性を絕つて了ふやうに、兒童が一氣に完全な成人に育たうとして一大突擊を試みたかのやうに見えます。が、實は子供の場合は獸類と異つて、五歳乃至六歳の頃になると、未だ何らの終點に達してゐないうちに突然その本能發展を停滯させて了ふのであります。そしてすでに幼兒の頃に我々を怪しませたあの本能衝動を滿足させる行爲といふやうなことに興味を失ひ、今迄はたゞ成人の願望として描かれてゐるに過ぎなかつた「おとなしい子供」の姿に漸く近いものになつて參ります。處が、實の所は、兒童が今迄に種々雜多な充足行爲に訴へてゐた彼の本能衝動といふものは決して消滅し去つた譯ではなくて、唯外面的に殆んど目立たなくなつた、言ひ換へれば、兒童のうちに潛在してゐる、つまり眠つてゐる狀

態に入つたに過ぎないのであつて、これがまた何年かを經過した後になつて、再びその勢力を増して捲土重來の勢で表面に現はれて來るのであります。永い間、性慾の發生する時期と見做されてゐた靑春期（Pubertät）なるものは、實は、抑々出生の當時から始まつて、幼兒期の終りに一旦停滯し、此時期になつて愈々本格的に終局に達する發展の云はゞ再版のやうなものに過ぎません。そこで、我々が兒童の發育狀況を、極く幼少の時代から此の沈靜の時代――精神分析では潛在期（La'enzperiode）と呼んでゐますが――を通つて靑春期迄辿つて行つて見ると、一時の間潛在して居つたその昔の惱みを彼が茲で再び新たに體驗するものだといふことが了解されます。幼兒期の彼に特有な內的葛藤の源となつた種々の感情狀態、例へば、父親に對する競爭心とか、或は汚物愛好の如き禁制の快樂を抑壓しようとする異常な努力とかいふものが、靑春期になつてから再び表面に躍り出して來て特殊な衝擊を彼に與へるといふわけであります。斯樣な事情で幼兒期の狀態は、屢々極く徵細な點迄靑春期と似通つた特徵を示し、またそれに反して、沈靜狀態に在る潛在期の兒童は多くの點で、落着いた分別臭い成人に似た樣子に見えるといふ現象が起るのであります。

(20)

處で、此の點にかけても教育は以前から兒童の內部情勢に關する充分徹底した心理學的理解をもつて仕事に掛つてゐるかのやうに振舞つて參りました。と云ふのは、斯樣に兒童が最早自己の內的葛藤に卷き込まれてばかりゐるわけでもなくなり、また本能の欲求といふものからも解放されるやうになつた此の潜在期を利用して智能の教育が始められるのであります。大昔から學校の先生方は、此の時期の兒童の本能衝動が少ければ少い程、それだけ學習能力が高まるといふことを承知してゐたものらしく、兒童の試みる一切の本能表現や、快感行爲を嚴重に處罰し、無慈悲に彈壓して來たのであります。

此の點に就ても學校と兒童ホルトの使命は自ら異つて居ります。學校の目的は何よりも先づ教授であつて、理解力の育成、新知識新概念の傳達、知能の發達等がその主な內容になりますが、ホルトの教育はこれと異つて幼兒期の間に完成されてゐなかつた本能教育を繼續するといふ課題をもつて居るのであります。然しホルトの教育者は、自分に與へられた時間の餘裕が僅少なものに過ぎないことや、また、青春期になつてから再燃しその強大な力で兒童を壓倒する性慾が、兒童の教育の可能性に一終期を劃することを心得て居りま

す。そこで、ホルトの教育者達の行ふ仕上げの教育が成功するか失敗するかによつて、大方の場合、此の最後の段階に於てもなほ、外部からの社會的要請と兒童の自我及びその衝動の肉迫との間に適當な調和一致を齎すことが可能であるかどうかといふ問題が決定されることになるのであります。

なほ皆様方は結局幼兒期に於ける教育の可能性と潛在期に於ける教育の可能性との相互の關係を御承知になりたいことゝ思ひますが、一體幼兒が兩親に對して抱く觀念と、大きくなつた子供が學校の先生方や其他の教育者に對してもつ觀念との間には何等かの相異があるものでせうか。それとも教育者といふものは、單に兩親の役割をそのまゝ引繼いで、父親なり母親なりの役をつとめ、去勢脅迫、愛情喪失の不安、良い行儀作法の躾け等の、昔變らぬ方法を用ゐて兒童に働き掛けねばならないものなのでせうか。兒童がエディポス・コムプレクスの高潮期に經驗して來た種々の難關を想ひ起すとき、私共は、學童のクラスと交渉する教師も此等の困難と似た而も一層複雜化された葛藤の卷き添へを喰はなければならないのかと思ふと、當然少からず恐れをなすわけです。が若しこの通りのことが起る

(21)

とすれば、多人數の兒童を相手にするホルトの女先生が手際よく母親の役を演じ、どの子供に對しても決して激しい嫉妬の對象となるやうなことをせず、一人一人に滿遍なく氣に入るやうに立ち廻はれ得るとは思へません。また、男の教師にしても、こんな多勢の兒童達の父として絶えず不安の對象となり、また反抗的傾向の目標となりながら、同時に一人一人の個人的な友人になつてやるなどといふことが如何に困難であるかは申す迄もありません。

が、私共は、此の時期迄には兒童の感情狀態そのものも變つて來てゐるのだといふことを忘れてはなりますまい。彼等と兩親との間柄も最早昔ながらの形で殘つてゐるわけではありません。此の年頃に幼兒的本能衝動の力が漸く衰へはじめ、それに應じて兒童と兩親との鬪係を支配して居つた激情も緩和されて參ります。但し、此の場合にも、此の所謂新たな變化なるものが此の時期の兒童の新しい發育の段階を示すものであるか、それともまた、兩親の側から不可避的に加へられる幻滅やら禁制やらのために兒童の激しい愛欲の要求が徐々に屈伏させられた結果であるのかは確言するわけには參りませんが、何れにせ

（22）よ兒童と兩親との交渉は沈靜に歸し、以前程激情的なものではなくなり、また以前のやうな排他性を失つて來るのであります。兒童は漸く兩親を理性的な眼で見はじめ、今迄は全能者の如く之を見做してゐた父親の過重評價をやめて、彼を現實の關聯に於て改めて見直しはじめます。また幼兒期の高潮期に於ては、成熟した大人の飽くことを知らぬ激しい愛情にも等しかつた母親への愛も、此の頃になればさほど求めるところのない且以前のやうに無批判的ではなくなつた和やかな情愛に變つて參ります。これと同時に兒童は、追々兩親から解放され、と並んで彼等の外にも自己の愛情と讃美の對象となるものを求め出します。つまり一種の分離過程に入るわけで、此の現象は潜在期の全體を通じて繼續されるのであります。斯樣に青春期の經過に伴ひ幼兒期の愛情の對象となつた人々への兒童の依存性が終焉を告げるならば、それは正に滿足な發育が遂げられた徴候であると申さなければなりません。あらゆる中間的段階を辿りきつた後、此の時期になつて漸く成熟した性器形成に到達した性本能は最早自己の家庭に所屬する對象にではなく、當然外部の對象に結びつく筈になつてゐるわけなのであります。

併し乍ら、斯樣に兒童が彼の幼兒期の最も大切な愛の對象であつたものから分離するといふ現象は一つの嚴重な條件の下に於てのみ起り得るのであります。これは、例へば、兩親が子供に向つて「お前は出て行つてもよろしい、が、但し我々も一緒に連れて行くんだよ」と言つて聞かせるやうなもので、兩親の教育的働き掛けは兒童が彼等から離れて行くことによつて終るわけではなく、まして、兩親に對する感情の冷却によつて終りを告げるものでは絕對にありません。唯、謂ふ所の働き掛けが直接的なものから間接的なものに移行するだけであります。私共は、幼兒が父親や母親の命令に服從するのは彼が兩親の側近に居つて彼等から直接に加へられる叱責なり個人的干渉なりを恐れなければならない場合のみに限るといふことを知つて居ります。獨りでほつておけば子供はやはり自分の思ひ通りに行動します。所が、生後二・三年を經過すると此の態度が改まつて來て、子供は、自分を育てる人が部屋から出て行つて了つた後も、許可されることと禁止されることとの區別を辨へ、この分別に從つて自分の行動を決することが出來るやうになるのであります。此の變化を見て我々は、兒童が外部から働きかけるいろ〳〵の力の外に更に內部的な一つ

の力を即ち內なる聲（命令）を發展させ、それに基いて態度を決定するやうになつたのだと申しますが、此の內からの聲つまり一般に良心と呼ばれるものの起源は蓋し明瞭であり（23）まして、要するにこれは兩親の聲の續篇であり、唯從來のやうに外部から働きかける代りに內側から働くやうになつたゞけのことであります。兒童は父親なり母親なりの一部を、と言ふよりは寧ろ兩親から繰り返し〳〵受取つた命令やら禁制やらを言はゞ吸收して了ひ、それを自己の一部に仕立てゝ了つたのであります。斯様に內面化された兩親の一部は、發育の過程に於て段々と外界に於ける兩親そのものの命令的・禁止的役割を引繼いで參り、現實の兩親から獨立して兒童の教育を內部的に繼續して行きます。兒童も此の本來は外部から這入り込んで來た彼の存在の一部分を自らの自我のうちに於て特に優れた地位に就け、遂には之を一種の理想のやうに見做し、悅んでこれに服從致します。時には、幼い頃實際の兩親に服從したときよりも一層奴隷的に服從することとすらあるのであります。

（24）斯うして兒童の哀れな自我は終生此の理想、即ち精神分析の所謂超自我（Über-Ich）の要求を滿足させることに努力しなければならなくなつたのでありまして、此の超自我の命令に

服從しない場合に感ずる不滿は「內部的不滿」と感ぜられ、また反對にその意志通りに行動し得るときの自己賞讃は「內部的滿足」として感ぜられるやうになり、從つて兒童と兩親との昔ながの交涉は兒童自身のうちでなほも繼續され、兩親が子供達に對して嚴格な取扱ひをして來たか、或は寬大な態度をとつて來たかといふやうなこと迄超自我が自我に對して採る態度に反映されるのであります。

茲に於て私共は、幼兒期の事情を考へ合せて見て、兩親から分離するために兒童が支拂はなければならない代價は兩親を採り込んで自己の一部分とすることだ、と言ふことが出來ます。（25）そして、此の同化の成否如何が同時に敎育の恒久的效果の標準になるのであります。

斯うなつてくると私共が最初に提出した問題、卽ち幼兒期の敎育の可能性と潛在期の敎育の可能性との差異は如何なるものであるかといふ問題の解決は最早困難ではなくなつて參ります。（26）一體幼兒と彼の最初の敎育者とは言はば相對峙する二つの黨派のやうに對立するものであつて、兩親は子供の欲しないことを要求し、子供の方ではまた兩親の氣に入ら

ないやうなことを求め、子供が全情熱をあげて自己の目標に向つて突進すれば、これに對して兩親の方では脅迫とか或は暴力の行使とかいふ武器をもつて對抗する外はないといつたやうな間柄にあります。兩者の目的は正に反對して居つて、兩親の方が得て此の抗爭の勝利者となるのは畢竟體力の點で兒童に優つてゐるからに過ぎないのであります。

處が、潛在期になると情勢はこれとは全然變つて參ります。此の時期を分擔する敎育者の前に現はれる兒童は最早昔日の純一な存在ではなくて、前に申した通り、內部的に分裂してゐるのであります。そこで、たとひ彼の自我が未だに幼兒時代の目的に向つて進まうと努力しても、兩親の繼續である彼の超自我は敎育の味方であります。それ故、敎育の可能性が大いになるか否かは成人の聰明さ如何に係つて參ります。(27) 例へば、潛在期の兒童をも依然として自分の仇敵であるかのやうに取扱ふ敎育者は甚だ誤つてゐるわけで、斯樣な態度をとる者は大きな利益を拋棄することになるのであります。これに反して、敎育者が兒童の內部に起つた分裂を正しく認識し之に順應して行つて、やがて兒童の超自我を味方に引き入れてこれと同盟を結ぶことが出來さへすれば、こゝに二對一の關係が出來あが

り、如何樣にも思ひ通りに兒童に働き掛けることが出來るやうになるのであります。

（28）また、教師と學級或は學童のグループとの關係は如何なるものであるかといふ我々の第二の問題も容易に解決することが出來ます。前にも申したやうに、教師は單に兒童のエディポス關係を繼承するばかりでなく、一グループの指導に當る際には、そのグループに所屬する兒童の各々の超自我の役割迄も引受け、從つて彼等の服從を要求する權利を獲得するわけでありますから、若しも教師が單に各々の子供の父親代りになるだけのことに過ぎないとすれば、却つて兒童が未解決のまゝ幼兒期から持ち越して來た種々の葛藤の對象と化し、その結果彼の指導下にあるグループは兒童のお互同志の嫉妬のために分裂して了ふでありませうし、また逆に教師が全部の者の共有の超自我、卽ち皆の理想そのものに成りおほせることが出來れば、强制的服從はやがて自發的服從に代り、グループの兒童は彼の下に於て一致團結するに至るであります。

第四講　精神分析と教育學との關係

——Die Beziehungen zwischen Psychoanalyse und Pädagogik——

（1）　私共はお互があまりに多くのものを求めてはなりますまい。皆様としても、私が僅か四回の短い講演で、一つの纏つた科學の最も重要な基本的事實以上のものを手際よく御傳へすることが出來るなどと思つて頂いてはなりませんし、——實際本格的に之を研究するとなつたらそれこそ四、五年はかゝりませうから——、また私の方でも、御話し申しあげた事柄を皆様が一々詳細に亘つて御記憶下さるだらうといふやうなことを當てにしてはならないのです。此の概論では極く要點だけを御紹介したために、或は折に觸れて却つて混亂を起すやうな結果になつたかも知れませんが、兎も角皆様はこの中から、精神分析を特徴づける三つの立場だけ位は恐らく指導原理として摑んで下さつたことゝ思ひます。

（2）　その立場の第一は、時期的分割に關するものであります。すでに御承知の通り、精神分

析は兒童の生活を三つの相異る時期に分けて、生後滿五才の頃迄を幼兒期、それに續いて十一歳以後十二、三歳の頃迄、卽ち青春前期（Vorpubertät）の開始頃迄を潛在期、次に成人期に達する迄の期間を青春期と名付けて居りますが、此等の時期にある兒童が自分の環境を形造つてゐる人々に對して採る感情狀態及び本能發展の諸段階は夫々の時期に特有なものであり、また夫々の時期に於ける限り正常なものなのであります。從つて、兒童の特殊な性質や、又特殊な反應の仕方といふものは、その兒童が現在通過しつゝある時期との聯關を離れては決して評價できないのであります。例へば、本能的殘忍性とか無恥とかいふやうな現象も、幼兒期乃至青春期に顯れるならば正常な發育の一段階と見做して差支へないわけであるけれども、若し潛在期に顯はれたりすれば、觀る者をして不安を懷せる原因となりませうし、また若し成長した曉に表面に出て來るやうなことがあれば、變態として取扱はなければならないことになりませう。また、幼兒期や潛在期に於ては自然であり望ましくもある兩親への強い愛着にしても靑春期の終り頃になつても未だ殘つてゐるやうな有樣では、發育が停頓した徵候と見なければならないし、激しい反抗心や內面的解放へ

の欲求が青春期に顯はれゝば正常な發育を助ける役割を果すけれども、幼兒期乃至潛在期に顯はれれば圓滿な自我發展の障りともなり得るわけであります。

（3）扨て、精神分析の第二の立場は兒童の人格の內部構造に關係する立場であります。恐らく今日迄皆樣方は、皆樣方の御世話なさつてゐる子供達を一個の統一體と御考へになつてゐて、その結果、彼の行動の矛盾性、彼の意志と能力との喰違ひ、計畫と實行との不調和、等のことを解釋することがお出來にならなかつたかと思ひますが、精神分析の考へ方に依れば、兒童の本性は本能生活（エス）と自我及び兩親から與へられた敎育の成果である超自我の三層に分かれて居るのであります。そこで、兒童の行動に顯はれる矛盾も畢竟彼の種々の反應の背後に其の時々に當つて主導的に働く此等の何れかの層の活動を認識することが出來れば容易に說明がつくのであります。

（4）扨て最後に、第三の立場と申すのは、兒童の人格の中の前述の三つの層の相互關係に關する立場でありますが、此處に層と名附けるものは、靜止してゐる狀態（Zustände）を言ふのではなくて、相互に抗爭し合つてゐる力（Kräfte）を意味するものと御承知願ひたい。

のであります。斯様な闘爭の結果は、例へば、兒童の自我と或る（彼にとつて）望ましくない本能願望と爭ひの結果は、各々の力の相關的強度卽ち願望の支拂ふリビドオの量と之に對して超自我から發動する抑壓傾向のエネルギーとの強さの比によつて決定されるのであります。

處で、以上に精神分析の三つの觀點を極く要約して實際に應用出來るやうに御說明申しあげたわけですが、これだけでは或は皆樣方が此の硏究から求めようとなさる教育上の御參考にはならないかと思はれます。皆樣方は大方理論的な理解を深めるといふことよりも、寧ろそれに基いて仕事を進めて行ける實際的な指針を御要求になつておいでになるのであつて、如何なる教育の手段が最も推奬に値するか、また兒童の全面的發育を育す處がある故に是非とも避けなければならない方法とはどんな種類のものであるか、そして、何よりも先づ全體として從來以上に教育する必要があるのか、それとも從來の教育が過度であつたのかどうかを御知りになりたいのではありますまいか。

此の最後の問題に對する答として申すべきことは、精神分析は今日迄教育學と交涉をも

（5）つ度毎に、常に教育の制限といふことを希望して來たといふ事であります。精神分析は私共に教育の齎す危險を明かに示してくれました。兒童が自己の環境を形成する成人達の要求を滿足させるためには如何なる道によることを餘儀なくされるかは皆樣もすでに御承知の通りでありまして、彼は先づ、自分の愛する或は恐れる人物と自分とを同一化すること（6）によつて幼兒期の强力な感情的結合（Gefühlsbindungen）を克服します。が、彼等は外部から加はる影響を免れるやうになる間に、他方自ら自己の內部に、此等外部の人々に倣つて一種の裁判所をつくりあげ、それによつて其の外部の人々の影響を持續するのでありま す。斯かる外部から內部への移入といふことが實に危險なので、このために教育する人々の發する禁止や要求やが頑固な融通の利かないものに化して了ふのです。つまり教育者達は生きた人間でなく、最早進展してゆく外界の變化に調子を合はせて行けないやうな歷史的殘滓となり了つてしまふのであります。現實の兩親は、行動的には理性の聲に從ひ新しい情勢の要求に順應してゆくことが出來、たとひ三歲の幼兒には嚴重に禁止したことでも三十歲の大人には當然許すだけの用意をもつてゐるでありませうが、彼等の命令の壓力下

（7）に形成された兒童の自我の一部分は飽く迄讓歩致しません。

以上の說明として二、三の實例をお話しすることにいたしませう。私の懇意な或る少年（8）は幼い頃非常に撮喰ひが好きでした。甘いものを欲しがる衝動が極端に強くて、到底許された方法だけでは滿足することが出來ず、あらゆる非合法的な手段を廻らしてお菓子の類を手に入れようと心懸け小遣がはいれば全部買喰ひに費ひはたし、そのうへどんな方法でもよいから用ゐて金錢を捻出しようとする程の有樣だつたのです。そこで、此の矯正教育をしなければといふ事になつて、先づ此の子は撮喰ひを禁止されましたが、其の禁止令が彼の熱愛する母親から出たことがまた特に此の壓迫を迫力のあるものにしたのでした。そこで彼の撮喰ひ癖はパッタリ止み、大人達は大いに滿足したといふわけです。處が、此の子供は半分成人しかけた今日、小遣ひは充分に費ふことが出來ウィーン中の菓子屋から甘いものをみんな買集めても何の干涉も受けない身の上になつてゐるにも拘らず、チョコレート一片口に入れるだけでも顏を火のやうに赤くしなければならないやうになりました。その樣子を見てゐる人は誰しも「これは何か禁められてゐることをやつてゐるのだな――

盗んだ金で買つたものを食べてゐるのだな」と思ひ込んで了ふほどです。つまり、例の禁止令が以前と變つた情勢に自働的に順應しなかつたのだといふことがお分りになると思ひます。

(9) これ程極端なものではありませんが、もう一つの例をお話しして見ようと思ひます。或る少年が特別に自分の母親を愛して居りました。彼は、母親の最も信頼する人となり保護者となりまた彼女から最も愛される人となりたい、つまり本來父親に屬する筈の位置に自分を据えたい、といふことをひたすら希つて居つたのであります。處が、實際は父親がゐて彼の求める位置を占め、いつ何時でも彼を母親から引離して子供の無力をマザ〳〵と彼に自覺させる權力を所有してゐるのだといふ無情な現實を度々此の子は經驗させられるのでした。此の様にして、彼は非常な強力者と認めてゐる父親を恐れるあまり、その位置を奪はうとしてはならないといふ禁止をシツカリと心中に植えつけてしまつたのです。處が後年、成人しかける頃になると、彼は自分の好きな女性と同じ住居または同じ家屋に居るやうな場合胸を搔きたてるやうな羞恥と不安とに惱まされ、揚句のはてはそれが到底堪え

きれない程の障害になつて來る有樣になりました。彼の不安の內容は、今にも何者かが現はれて彼が現在腰を下してゐる或は立つて居る其場所は他人の場所であつて其處に居續ける權利はお前にはないのだ、と言ひさうな氣がすることとなのでした。これは彼にとつては此上もなく苦痛な立場なので、彼は若し其のやうな（架空的）人物がやつて來た場合には、自分が其場に居合せたことをどういふ風に手際よく言ひ繕つたものかと一所懸命になつて工夫しなければならなかつたのです。

（10）

またこゝに別の例があります。極く幼い少女なのですが裸體になることが大好きで、兄弟達の前で裸體になつて見せたり、寢床に入る前に一糸も身に纏はずに部屋の中を驅け廻はるのを喜んだりして居りました。彼女の場合にもまた教育が効を奏して此の兒は此の欲を抑へつけるために非常な努力をしたものです。その結果はといへば、極端なハニカミやになつて了つて、永い間その癖がとれなくなり、後年、職業を選ぶことになつたときも、同僚と同室しなければならぬやうな仕事を勸めやうものなら、彼女はキツパリと「それは私には向きません」と斷るやうになりました。一應筋の通つた表向きの理由の裏には、他

人の前で衣服を脱がなければならないといふ惧れが潜んでゐたのです。自分がその職業に適してゐるかどうか、或はその職が好きか否か、といふやうな事柄は此の娘の場合到底幼兒時代から持ち越して來た禁止の強さの前には問題にならないのでした。

（11）此等の發達障碍や發育不全の治療に從ふ精神分析者は、教育をその最も悪い側面から知るやうになるのであります。一體、教育といふものは大砲で雀を射つやうな眞似をしてゐる。そんな事をやるよりか、子供部屋では適宜に禮儀や作法に就て割引をしてやつて、撮喰ひのしたい兒には撮喰ひをさせるがよし、父親氣取りでゐたい者には勝手に妄想させるがよし、また裸體になりたいのには裸體を、性器を弄びたい兒にはその遊戲を、自由にやらせたらよいではないか、一體幼兒期の快感行爲なるものが、所謂良い教育の齎す諸々の損害に比較して將してそれ程特殊な重要性をもつてゐたものなのだらうか。例へば、教育の結果兒童の人格内に分裂が生ずることや、その個性の一部分が他の部分と葛藤を起すことや、また愛する力が削減されて了ふ結果悦びを味ふことも活動することも出來ない人間が出來上るといふやうな事實と比較してみるとき、將してどれだけの意味があるのか。此

の樣な疑問をもつ分析者は、結局、先づ自分だけは少くともこんな眞似はすまい、自分の子供達はこんな方法で敎育するよりは寧ろ自由に放任しておいて、幼い頃から強制を加へて人格的不具者をつくりあげる位なら成人した曉に聊か我儘者が出來る方がまだましだ、と心得ることでせう。

と、こんな風に申すと皆樣方は、私の觀方があまり一方に偏してゐるのに驚かれるに相異ありません。が、此の邊で一つ立場を變へて眺めて見る方がよからうかと思ひます。扨て、同じ敎育でも、從來考へて來たものと全然別の全く異ふ目的を掲げた見地から之を眺めますと大いに趣きを變へて參るものであります。

（12）例へばアウグスト・アイヒホルン（August Aichhorn）がその著『不良少年』（Verwahrloste Jugend）の中に述べてゐるやうな不良兒を對象とする敎育を考へて見ませう。

アイヒホルンによれば、不良兒は自己を取卷く人間社會の仲間に編入されることに對して反抗するものであつて、本能滿足の衝動を抑制することが出來ず、また性本能のエネルギーを轉じて別の目的、即ち社會的に一層高位に置かれてゐる目的に向けることが出來な

いのであります。そして、社會に一定の標準を與へてゐる諸々の制約を自己に課することを拒み、また此の共同社會に於て自分の持分となるべき勞働に服することをも拒否するのであります。

斯樣な者に對して、教育的に或は分析的に働きかけようとする者は、何よりも先に次の如き印象を受けないではゐられません。卽ち彼の幼兒期に於て、先づ外部から本能生活に抑制を與へ、驟てその外部的な抑制を徐々に彼の內面生活に同化させて行くやうな力が與へられてゐなかつたのは洵に遺憾だといふことであります。

(13)

茲に一例として、一時ウィーンの少年審判所の厄介になつてゐた或る少女を取り上げて見ませう。當時八歲であつた此の兒は家庭でも學校でも持餘し者でした。どんな教育機關に託して見ても、何處の養護所に預けて見ても、三日も經たぬうちにアツサリ兩親の手許に戾されて了ひます。勉强は一切しないし、他の子供達と一緒になつて働くこともしない。その上、愚鈍の風を裝ふことが極めて上手で、大概の所では知能的に缺陷があると診斷される始末。授業時間中には教室の腰掛の上に寢轉んで性器を弄んで居つて、これを妨げよ

うとすれば大聲で喚きたてるものだから大人の方が閉口して引退つて了ふ有樣でした。兩親は外に手の下しやうもないと考へたものと見えて、家庭では此の兒を唯々虐待してばかりゐたのでした。處で、分析的に此の少女を觀察して見た結果、次のやうな二つの事實が判明いたしました。先づ第一に、此の子供が周圍の人々との間にもつ感情的なつながりの發達を促す上には外部の情勢が洵に不都合だつたといふことが明かになつたのでありす。自己の肉體に依つて快感を得る行爲を放棄して了つたために生ずる快樂の損失を埋合せてやるだけの愛情の補償ともいふべきものは、どの方角からも彼女には與へられなかつたのでした。また兩親が頻りに處罰を加へて見ても、彼等の期待するやうな抑制的効果などは一向に現はれず、却つて此の少女は——素質的にか、それとも幼兒期に於ける何かの重要な體驗によるものかは判然としてゐませんが——強度のマゾヒズムに陷つてゐて、懲罰を加へれば加へる程それが逆に性的興奮と性的行爲への刺戟になる、といふことも明かになつて來たのであります。此の不良兒の例を前にお話ししておいた種々の發育障害の實例と比較してごらんになると、此の兒もやはり自由な一人前に纏つた人間にはなれなかつ

たのだといふことがお分りになると思ひます。彼女は、道徳的發育と共に精神的發育をも停止して了つた小さな脅かされた獸の如きものに過ぎなくなつて了つたのであります。

(14) また同じ書物の中でアイヒホルンはもう一つの著しい不良化の例を擧げて居ります。これは、六歳の頃以來何年となく自分の一身邊者から總ゆる種類の性的快樂を得て來た男の子ですが、成熟してからはその女性と本格的な性的交渉を結び、遂に自分と同年輩の少年達が纔かに空想の裡に描き得るに過ぎなかつたことを現實に獲得しおほせたわけなのであります。が、扨て、前に申したやうな所謂教育なるものが齎す面白くない結果を思ひ合せて、此の兒は嘸かし統一のとれた、活力の充ちみちた男性になつたであらうと思ふと、事實は

(15) さうでない、彼の發育過程には謂はゞ一種の短路ともいふべき現象が起つたのであります。

卽ち、早くから願望を充足することの出來た彼は、廻はりくどい成長の經路を省略して了つた、つまり父親にのみ許された充足の機會を得たいばかりに、自分が父親になりたいといふ「一般の子供達のもつ」願望は彼にとつては用のないものになつたのです。その爲

(16) に彼は人格の分裂を免れることは出來たが、その代りに、或る時期以後の發育を不必要な

ものとして全然停めてしまはなければならなくなつたのであります。

斯様に御話しして參りますと皆様もすでに御氣付きのことと思ひますが、實の所問題は私の申す程困難な狀態にあるわけではございません。抑々發育障害と不良化とは双方共に極端な結果に立ち至つた場合であつて、一方は過剰な抑制の、また他方は一切の抑制の缺除の影響を示すに過ぎないのでありますから、分析の示す諸々の事實の上に樹立さるべき精神分析的教育學の課題は、從つて、此等の兩極端の中庸を見出すこと、卽ち、兒童の夫々の年齢に應じて、快感行爲の承認と本能の抑制とを適宜に按配して與へることにあるといふべきなのであります。

處で、本來ならば、此の新しい教育的分析の方法論を詳細に御紹介申すことが私の皆様に對する御報告の內容になるべき筈のものかも知れません。が、實は、精神分析的教育學なるものは今のところ未だ出來上つてゐないのであります。唯僅かに、此の方面に關心をもつ個々の教育者——卽ち、先づ自分から分析を受けた結果、自らの本能生活に關して理解し得た事柄を以て直ちに兒童の教育に應用しようとする人々が存在するに過ぎません。

斯様な次第で、愈々根本の原理が組織され、廣く一般の應用に適するやうな方法が出來上る迄には相當の時日を要するものと思はれるのであります。

とは申しながら、精神分析は敎育學に對して僅かに將來の示唆を與へる外には聊の貢献もして居ないと考へて頂いてはなりません。精神分析の如きは實際の仕事に携つてゐる敎育者が問題とするに値ひしない、寧ろその樣なものは敬遠して了つて十年か二十年も經つた頃に一體精神分析の敎育的應用はどうなつたかと尋ねた方がよい、等とお考になつては困ります。

(17)

精神分析は、今日既に敎育學に對して三通りの貢獻をしてゐると私は申したいのであります。第一に、既成の敎育型態に對する批判の役割を勤めます。次に、精神分析的心理學として、本能・無意識の學說、リビドオの原理を以て、(前回の三つの講演によつて皆樣も御承認下さつたやうに、)精神分析は人間に關する敎育者の認識を擴大し、且又、兒童と成人である敎育者達との諸々の複雜した關係に對する理解を深めます。そして最後に、兒童分析、治療方法としては敎育過程に於て兒童に加へられた種々の損傷を治療する役割

以上三つの點のうち第二の點、即ち意識的行爲の無意識背景を通じての教育局面の解明を演ずるのであります。

といふことに就て次に一つの實例を御話し申上げませう。

（18）

これは或る優秀な女教師の例ですが、此の人は十八歳の時家庭の不幸な事情のために兩親の許を離れて、三人の男兒の家庭教師として教育者生活を始めたのです。此の三人のうちで中の子供が如何にも教育し難い問題の子供でした。勉強は出來ず、臆病で引込思案で陰氣で、家庭に於ては才能も優れた可愛らしい兄弟達の下積にされてゐました。そこで、家庭教師は、彼女の熱と關心とを擧げて此の兒童に注ぎ比較的短い期間に見事に成功したのであります。此の子はいつしか先生が好きになり、未だ嘗つてない程打ち込んで彼女を愛し、態度も率直に親しみ易くなると同時に、勉強に對する興味も增して來て先生の努力の結果二年分の教材を一ケ年の間に教へ込む事が出來たので、學業の後れたのも無事に取戻せたのでした。兩親も斯うなると今迄は餘り可愛がらなかつた此の兒童に就て誇りを感ずるやうになり、前よりも多く面倒を見てやるやうになつて來たので、此の兒と兩親との

間柄もまた兄弟仲も從つてずつと良くなり、遂には此の兒が家中でも一番大切な人間になつたのであります。處がここに豫期しない難關が現はれたといふのは、斯樣な大成功を獨力で獲た家庭教師の先生自身が、どうしたものか此の子とソリが合はなくなり、いろ〳〵悶着を起して子供に對する愛情を全然失つて了ひ揚句の果は全く子供と離れて了つて、最初あれ程迄に魅力を感じたその子故に折角その勞を感謝してゐる一家の者と手を切つて了つたのでした。

此の女教師は、その時から十五年も經過した後に、教育上の必要から精神分析的處置を受けたのですが、この治療によつてはじめて、此の事件の眞相が明かになつたのであります。彼女は幼い頃、自分が家庭内では、ちやうどあの三人のうちの中の子のやうな愛されない子供だと空想してゐたのでした（これは故無きことではありませんでしたが）。そこで、彼女は中の子が下積みにされてゐるところから、此の子のうちに自分自身を見、自分と彼とを同一化したのであります。從つて彼女が此の子に注いだ愛情と配慮とはとりもなほさず「私を物にしたいのなら、こんな風に取扱つてくれなければならないのだ」といふ

彼女自身の叫びに外ならないのでした。處が、此の教育が首尾よく成功したとき、彼女と子供との同一化は消失して了つて、最早彼女の生活と何の交渉も無い獨立の人格を具へた教へ子が出來上つたわけです。斯樣にして、自分ではどうしても獲ることのできなかつた成功を此の兒童が收めたことは許し難いといふ嫉妬心から其の後の敵對的な激情が起つて來たのでした。

皆樣方はその教師が當時分析を受けてゐなかつたことは仕合せだつた、さもないと教育の效果があらはれなかつたかも知れないと仰言るかも知れませんが、その所謂教育の效果なるものは餘りに高價な代償を必要とするのではないでせうか。これでは、教師が幼い頃に體驗した惱みと同じ性質の惱みの徴候を示しそれを通じて教師の共感を得ることが出來ない不幸な子供達は救はれないではありませんか。教師や教育者は教育の仕事を始める前に、先づ以て自己の內心の葛藤を認識しこれを制禦する術を知らなければならない、斯う要求することは正しいと私は思ふのであります。若し豫め此の事が出來てゐなければ、教へ子は教師自身の意識されない未解決の惱みを發散する (abreagieren) 上に都合のよい材

料となるに過ぎないのであります。

また、兒童を認識判斷する場合にも、その態度行動を表面的に觀察するだけでは大方の場合不充分と申さねばなりません。次に御紹介するのは、或る男の子が大きな著作の第一章として綴めたものですが、事實は、よく子供達がやるやうに、これだけの斷片で了つてゐる手記であります。

第一章　大人はどんな惡いことをするか

『ほんとの事を知りたい大人達は聞いて呉れ。大人には出來ることでも、子供には出來ないなどと生意氣な事を考へてはいけない。子供だつてお前達の出來る事なら大概は出來るんだぞ。だが、「おい着物を着換へるんだ、早くそら」なんどと威張つても子供は言ふ事を聞きやしない。當にしても駄目だぞ。けれど、優しく言つてくれりや直ぐにやるさ。お前達は何でも自分の仕たいほうだいに出來ると思つてゐるけれどそれは嘘だ。「かうしなければいけない、あゝしなければいけない」なんて餘り言ふなよ。どんな人間でもしなけ

りやいけない事なんかないんだ。だから子供だつてしなくてもいゝんだ。お前達は體を洗はなければいけないと思つてゐるけど、そんな事はない。「人が見たら、オヤ、汚い子だつて云ふから洗はなければいけないんだよ」なんて言ふけれど、洗はなければいけないんぢやない、唯洗はせられるだけなんだ。

子供達には、どういふことをすればいいかそれさへ話して呉れゝばもう澤山だ。かういふ風にしろあゝいふ風にしろ、とあんまり指圖して貰つちや困る。子供だつて大人のやうに正しいと思つたことをするんだから。それに「これを貰つちやいけない」などと言ふのもよくない。自分でお金を出せば何を買つたつていゝぢやないか。子供達に「お前にはそんな事は出來ないよ」なんて言ふな。子供達だつてお前達よりやよつぽど上手に出來る事だつてあるんだ。それをちつとも本氣にしてくれないで後から吃驚りしてるぢやないか。何しろあんまり喋らないで、たまには子供にも口をきかせて呉れよ。』

×　　×　　×

皆様、若し此の文章がどこかの學校で發見されて、校長の手許に屆けられたとしたらど

うでせう。恐らく校長は「これは危險な少年だ。注意しなけりやならん」と考へることでせう。が、一層注意して見ると、これを書いた兒童に就てはもつと重大なことがあるのです。此の兒は神に對して冒瀆的な言葉を吐き、口にするさへ汚らしい言葉で牧師を罵り、また仲間の子供達を煽動して凡ゆる干渉に反抗させるといつた風な事を常習的にやる上に、動物園に押し入つて不法に檻禁されてゐる動物を檻から解放してやらうと企てたことさへあることなどが、明かになつて來たのです。此の場合、舊型の保守的な牧師であれば、「この兒の反抗心は凡ゆる手段を講じて抑へつけて了はなければならない。手後れになると社會組織に對する危險な強敵になる惧れがある。」と言ふでせうし、近代的な教育者であれば、これとは反對に、此の兒童の將來に絕大なる希望を懸け、彼こそはやがて大衆の指導者となり解放者ともなるべき人物だと考へることでありませう。

然し、舊型の教師も近代的教育家も、兩方とも間違つてゐるのであります。そして、彼等が此の事件の外觀的認識の基礎の上に計畫して行く教育活動は凡て危險な誤つたものなのであります。此の八歲になる男の兒は單なる無害な臆病者に過ぎません。犬が吠へれば

慄へあがり、夜は恐くて暗い廊下が歩けず、それこそ蠅一匹さへ傷けることのできないやうな意氣地無しに過ぎません。その意氣地無しがどうしてこんな反抗的な文章を書くか、その次第は斯うです。此の兒童の幼兒期の激しい感情關係——自分の性器を熱心に玩弄する行爲と結び付いた——は教育の結果、また非常な衝擊を彼に與へた醫療の結果、破壞されて了ひましたが、その後に殘つたものは、新たな誘惑への防禦線としての激しい恐怖、卽ち、自分の體の罪深き部分（ペニス）に罰を加へられるのではないかといふ恐怖、精神分析の術語で「去勢恐怖」といふものであつたのであります。此の恐怖感が彼をして凡ゆる權威を否定せしめることになつたのであつて、「凡そ強力な者が存在すれば、その者は自分を處罰することが出來るのだ。それだから、天上たると地上たるとを問はず、凡そ支配者の存在を許してはならない。」と斯う彼は考へるのです。誘惑に對する恐怖が強ければ強い程、彼は此等の權威に向つて無害な攻擊を加へてその恐怖感を屈服させようとします。しかし此の樣な騷々しい方法が彼の防禦策の唯一のものではありません。彼は無神論者のやうに裝つてゐますが、夜になればちやんと跪いて恐怖におのゝきながら祈禱を捧げ

るのです。「神様なんかありやしないさ。でも、ヒョツトするとあるかも知れないぞ。とにかく神様には行儀よくしておいた方がいゝ。」と彼は考へるのです。

つまり、此の子は社會の仇敵になりもしなければ、さりとて大衆の解放者になれる柄でもありません。彼にとつて必要なものは、その威勢のよさを讃美することでもなく、また彈壓を加へることでもなくて、何等かの方法を用ゐて內心の恐怖を鎭めてやり、彼を神經症的な生活の仕方から解放して、悅びと勞作の力とを與へてやることにあるのであります。

そのやうな結果を招來することのできる精神分析的處置方法こそ、精神分析が教育に對して貢獻すべき第三の仕事であるわけです。が、その方法、卽ち兒童分析の方法を詳述することは今回の講演の範圍の外にあると考へるのであります。

——（完）——

附錄註解

大槻憲二
宮田齊

凡例

（一）註解の番號は本文上欄の相當個所の數字と符合す。
（一）譯文に關する註解は特に文末に（譯者）と明示す。
（一）内容に關する註解は大槻の責任とす。

第一講

(1)この講話は、教育者の下に來る頃の幼兒は既に四、五歳までの生活に依つて相當の程度まで出來上つてゐる者であることを覺悟し、それに對する態度と方法とを決めてかゝらないと勞して功なく、寧ろ害があると云ふことを警告してゐるものである。

(2)「活動」と云ふのは、積極的に相手に働きかけ、扱つてやらなければならないと云ふ意味。數行後の「受身的の觀察者」に對照する言葉である。

(3)ホルト存在の理由と價値。

(4)ホルト教育者の特別に困難な立場。兒童がひねくれてゐて反應しにくいこと。

(5)幼稚園兒すら「仕上つた人間」である。

(6)兒童の反應の仕方の區々なること。

(7)幼兒期追憶の想起

(8)幼兒期追憶は忘却の穴だらけ。

(9)正統派心理學の誤り。

(10)忘れたい願望。幼兒期忘却の原因はこの抑壓的願望のみならず、記憶の主體たる自我の未發達なること、及び記憶せらるべきことへの纒綿エネルギーの經濟的節約のためと、三つを數へねばなるまい。

(11)原語は seelisch Erkrankte で、神經症を含む廣い意味の病者。(譯者)

(12)幼兒と獸との類似。

(13)人間が神經症になることとの一般的原因の一つ、これを生物學的原因と云ふ。父フロイドはこの他に二つを擧げてゐる。系統發生的原因と心理装置の三區分立と。詳しくはフロイド著『禁制と症候と不安』又は大槻著『育兒と教育』一〇三頁參照。

(14)幼兒心身の平和と母の愛。
(15)母子相愛關係に水をさすもの。
(16)最初の嫉妬。
(17)同胞愛の發見。
(18)無產者の子供と中產階級の子供とに於ける愛情の比例。
(19)以下此の關係に於いては「小兒」(Kind)の代りに「男兒」(der kleine Knabe)といふ語が用ゐられてゐるが、譯文では「小兒」を使用した。但し「男兒」を用ゐることは極めて重大な意義があるから、充分注意して讀んで頂きたい。(譯者)
(20)多くは對兩親の既製反應の反復。
(21)母から離されて育つた子供の場合。
(22)別居してゐる兩親を調停しようとした八歳男兒の言葉。
(23)子供の教育は何時開始すべきか。
(24)精神分析の勝利。

第二講

(1)第二講は、幼兒期の本能的感情の未熟な形に於ける發現に對してあまりに無理解で過酷な抑壓的態度で臨むことは逆効果を擧げてよくないと云ふ警告を與へ、それ等の本能的感情の心理學的意義を說いてゐるのである。
(2)幼兒心理と成人心理とを混同するに非ずやとの誤解と批難。
(3)Don Carlos (1787) シルラー作の古曲戲曲。スペインの太公ドン・カルロス(1545—68) と繼母エリザベートとの戀の經緯に取材したものであるが、史實とは異なるといふ。(譯者)
(4)獨逸法廷での判決。

(5)養護と教育との別。
(6)養護の定義。
(7)教育の定義。
(8)子供の惡戲との闘爭。
(9)教師の裁判官的態度。
(10)精神分析に依つて偏見は除かれた。
(11)おしやぶり。
(12)三七―三八頁參照。
(13)清潔にさせること。
(14)兒童の殘忍性。
(15)昆蟲や玩具を破壞する心理。
(16)破壞本能の快樂。
(17)教育の逆効果。
(13)オナニー。
(19)性的なものとして包括。
(20)口唇と肛門。
(21)變態者。

(22)兒童發達の諸段階。
(23)二種の脅威的制止法。去勢恐怖と愛情喪失の恐怖。
(24)脅威的教育の二つの惡反應。
(25)日本人の場合にも勿論多少は見られるがこれほど顯著には見られないやうである。西洋に於いてはキリスト教的教育の影響等により抑壓的態度が苛酷になつてゐたらしい。日本人は性本能的の問題を風流的に解釋しようとして來た。それにも固より別種の弊害はある。

第三講

(1)潛在期は四、五歳から思春前期(十二、三歳)までを云ふ。この時期にはそれ以前(生後から三、四歳)までに花咲き出でゝゐた幼兒期性感が無意識的に抑壓を受けて

即ち本能力と抑壓力との鬪爭葛藤の結果、種々の變化(反動、昇華、枯死)を生ずる。激流とそれを堰きとめる水流との關係に比較して考へるとよく分る。水流に堰かれた激流はどうなるか。一部は堰の上を越して堂々と進んで行くであらうし、(正常の本能)他の一部は反流して元の方向に戻つて行くであらうし(反動構成)、更に他の一部は空しく地底に吸收せられてしまふであらうし(抑壓)、最後の一部は飛沫となつて天空に舞上る(昇華)であらう。これ等四つの變化は必然である。それをどの程度に按配するかは兩親に依る教育の骨子であるし、學校に來た子供がその精神構成に於いてどのやうな結果になつてゐるかを觀破してそれに對する態度を適當にとることは學校教師の任務である。かくして兒童に於いて超自我(良心)の形成は必然であるから、教師は彼等の愛情の對象となつてはならず、むしろ兒童等の共通の超自我代償とならなければならない、と說いてゐる。

(2)精神分析で云ふ無意識とは、意識せられてゐなくても意識の背面にあつてこれをあやつる力のあるものとして考へられてゐることである。それが從來の心理學に於ける潛在意識觀と違つてゐる點である。潛在意識は忘却の底にあつてたゞ靜かに眠つてゐるだけのものとして考へられてゐる。

(3)抑壓の說は、精神分析學の根本原理である。無意識内にあるものが意識化せられることへの禁制を受けること、その禁制は檢閱作用と呼ばれ、主として自我の仕業と解せられる。抑壓は必要ではあるが、その程度と方法とが問題である。

(4)弄糞的傾向は殆ど一切の精神病者に見られ、これは病者の精神が幼兒期に退行してゐるがためと分析學は説明する。

(5)本能の流れが抑壓(禁制)に會して逆流(即ち反動)して來た結果、形成せられた心理的徴候を云ふ。例へば、病的な潔癖は弄糞欲望の反動形成であるやうなものである。弄糞慾が昇華せられると彫刻家的慾望となつたりすることもある。

(6)第5註參照。

(7)醇化とも云ふ。第1註參照。

(8)意識は總てを區別し分析するのがその特質であるが、無意識は總てを錯綜し結合させるのをその特質としてゐる。併し結合し錯綜させるのに一定の法則がないわけではない。何かの類似點や共通性があると、極めて容易にそれがなされる。例へば幼兒は父親と先生とを同一視(錯綜)する如きである。かくて幼兒の觀念中に於いて兩者は復合體をなしてゐるのである。

(9)二〇頁參照。

(10) Kastrationskomplex は去勢コムプレクスと譯すべきであらうが、此處では手・舌なども含んでゐるので、原音で表はしておいた。なほ此の一節に關しては「精神分析」誌第五卷第一號所載の大槻氏稿「思春期の特質」及び第五卷第四號の加藤氏譯「去勢コムプレクスの由來」を併せ讀まれることをお勸めしたい。(譯者)

「思春期の特質」は「思春期の性心理」と改題して大槻著「續・戀愛性慾の心理とその分析處置法」の中に收載せられてゐる。

(11)強迫的とはこゝでは本能的、無意識的と云ふ意味で、つまり意識にとつて統御出來

ない力を持つてゐるとの意。
(12)轉嫁は「交付」と云ふ意、一定の相手に寄せてゐた感情を、その相手と錯綜せられたる別の相手に轉じて寄せる意。
(13)エネルギーは物理學的概念であり、リビドーはその心理學的意味に近い。
(14)第二の時期の潜在期のこと。
(15)學童には對社會順應の覺悟のあることを豫想してかゝるのは、成程必要なことである。この覺悟の出來てゐない兒童は登校を肯じないであらう。
(16)そこに教育の希望と可能性とがある。
(17)抑壓は必要ではあるが、度を過ごすとかう云ふことになる。その程度を知ることは教育者の分析的な勘に待たねばならぬ。
(18)學童期におとなしすぎる子供は靑年となつて大抵は神經症となる。それには私が多くの神經症患者を扱つて見ての統計的結論である。
(19)研究所又は實驗所。
(20)思春期又は第二開花期。第一開花期との中間に潜在期をおく。
(21)兩親と教師との相違點。
(22)「この時期の兒童の新しい發育の段階」とは、人類一般の系統發生的原因による變化、卽ち先天的人類遺傳的變化と云ふ意味兩親の側から……結果」とは環境による後天的變化と云ふ意。
(23)「内なる聲」とは超自我。超自我の聲は現に精神病者に於いて、屢々幻聽として現はれる。
(24)自我は超自我の外に、無意識本能、現實外界、の三者に奉仕せねばならぬ。
(25)外なる兩親を內に取込んで超自我とな

る。かくて兒童は兩親を離れても常に兩親と同居してゐるのである。「神は不斷にわれ等を見守り給ふ。」

(26)幼兒期教育と潛在期教育の差異。

(27)兒童の心理を知らない人々は、そこに少しでも不道德的なものや早熟的なものを認めると、えてしてから云か態度になりがちであるが、それは逆効果を擧げる。

(28)二對一とは、兒童の自我一に對して、その超自我と超自我象徵としての敎師との合體(卽ち二)との對立との意。

(29)敎師はとかく生徒から愛せられることを考へ過ぎる。愛せられる前に尊敬せられなければならぬ。

第四講

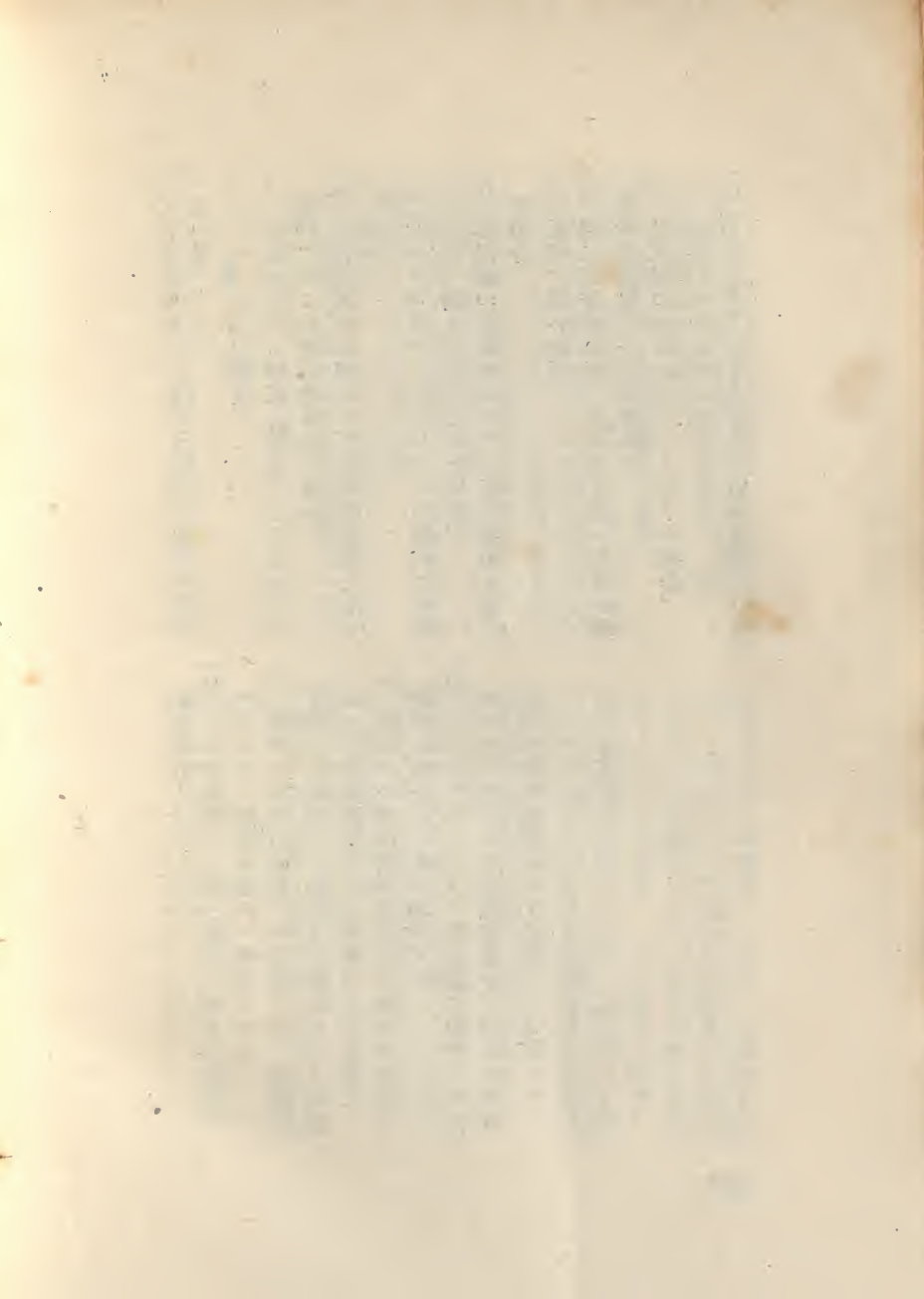
(1)この講に於いてはまづ精神分析學の特徵的立場三つ(本講第二、第三、第四註を參照)を擧げ、その立場からの敎育法の有効であることの證明として、三つの病的心理のケース二三を紹介し、次に精神分析學からの敎育學的貢獻三件(第一七註參照)を說き、次に分析を知らない敎育法の如何に見當違ひになり易いかの證據二つを擧げて、敎育者の分析學への關心の必要を說いてゐるのである。

(2)精神分析の特徵的立場の第一。潛在期を挾んで、第一、第二開花期に分れてゐること。系統發生的見地と云ふことが出來る。

(3)第二の立場。心理機能分立觀。それ故に人間はすべて三重人格者であると見なされる。

(4)第三の立場。心理の動的見地、又は力學的見地と名付けられる。

(5)教育の制限、つまりやりすぎないやうにとの意。
(6)七七、七八頁參照。
(7)取込まれたる兩親(超自我)は取込まれた當時のまゝの幼兒期形態で殘る。
(8)口唇快感が禁制せられた病的定着となつた場合。
(9)エディポス・コムプレクスの病的に抑壓せられて對人恐怖となつた場合。
(10)露出慾の禁制せられて、病的羞恥となつた場合。
(11)教育の悪い側面。
(12)同じ原著者の著、馬場由子譯「兒童心理分析法講話」一二頁參照。
(13)自慰癖のあるマゾヒスト少女の場合。
(14)本格的エディポス少年の場合。
(15)Kurzschluss, short-circuit, 電氣技術上の用語を轉用したものである。(譯者)
(16)これが父親への同一化の一機會であり、エディポス願望昇華の一機會である。
(17)精神分析學の教育への貢獻三件。從來教育學への批判と、教育者と被教育者との關係への理解深化と、治療教育法的意義と。
(18)教師の心理的病根に依つて教育的効果の擧がる場合と、その功罪。
(19)アプレアギーレン。無意識に鬱積して出口のない何らかの本能感情が、何かの出口を見つけて滿足せしめられること。

——(完)——

昭和十六年十二月十五日　印　刷
昭和十六年十二月二十日　初版發行

『教育者の爲の精神分析講話』

定價　九　十　錢

著　者　宮田（みやた）　齊（ひとし）
東京市本郷區駒込動坂町三二七

發行者　東京精神分析學研究所代表
大　槻　憲　二
東京市小石川區指ケ谷町一四六

印刷者　大　森　清　一
東京市本郷區駒込動坂町三二七

發行所　東京精神分析學研究所出版部
日本出版文化協會員番號一二〇〇三四
振替東京七八八一七番

配給元　東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

精神分析研究會員規約

一、精神分析學研究の目的を以て本研究所と直接交渉を持ち所定の手續きを了したる向きは、月例研究會及び講習會に出席すると否とを問はず、總てこれを研究會員と稱す。

一、研究會員は會費として半年分（一圓八十錢）又は一年分（三圓六十錢）前納の義務を有す。

一、研究會員は年約四回發行の『精神分析叢書』（定價各約一圓）の外に、大體隔月發行の『東京精神分析學研究所報』（當分菊版八頁、非賣品）の配布を受く。

一、研究會員はその研究、感想、報告を編纂委員の諒解を得て『叢書』に發表し得るのみたらず、司會員の承諾を經て研究會及び講習會に出席することを得。また研究上に關する各種の相談（診療はこの限りに非ず）に對する應答を受け得るのみならず、隨時催さるべき公開講演會又は映畫會に特別の權利を享受するを得。

一、入會希望者は會費と共に、住所、姓名を始め、迷惑に非ざる限りは年齡、職業、その他を報告せられたし。（但し『叢書』は第何號より送附すべきかを明記せらるべきこと。）

精神分析叢書

第一册　**兒童心理分析法講話**（アンナ・フロイド）……馬場由子譯

第二册　**精神分析技法入門**（ステーケル）……飯田喜代治譯

第四册　**夢の分析法手引**……大槻憲二編

第三册　**教育者のための分析講話**（アンナ・フロイド）……宮田齊譯